

香芝市子ども読書 活動推進計画



平成20年3月

奈良県香芝市

香芝市子ども読書活動推進計画 目次

策定にあたって	P . 1
はじめに	P . 2
第1章 基本方針	P . 2
第2章 香芝市の子ども現状と課題	P . 3
〔子どもの育ち〕	
〔香芝市における子どもの読書環境〕	
1) 家庭・地域における現状と課題	P . 5
子ども文庫活動	
子どもへの読書活動	
2) 学校における現状と課題	P . 7
1. 学校図書館の整備	P . 7
環境整備	
開館時間の拡大	
スタッフの配置	
蔵書の充実	
学校図書館ネットワークシステム事業の充実・進展	
2. 学校における読書活動	P . 9
学校全体での読書活動への取り組み	
図書委員会など、児童・生徒の活動の充実及び促進	
図書館教育研究会の充実	
3. 幼稚園における現状と課題	P . 9
3) 市民図書館における現状と課題	P . 10
利用状況及び登録率	
行事・育児支援	
学校との連携	
活動人員の育成と確保	
中高校生への読書活動	
4) その他、市の行政機関	P . 13
子育て支援における読書活動支援	
〔ブックスタート〕	
保育所	
その他、公的機関	
5) 小・中学校における読書アンケート調査より	P . 14

小学生への調査
中学生への調査

第3章 具体的方策	P . 1 7
1) 家庭・地域	P . 1 7
親子で読書を活性化する取り組み	
地域社会の読書サークル活動、自治会、民間の読書活動	
2) 学校	P . 1 8
1 . 学校図書館の充実	P . 1 8
資料・環境の整備と充実	
人的配置の推進	
学校図書館ネットワークシステム事業の充実・進展	
2 . 学校における読書活動の推進	P . 1 9
読書指導の推進と充実	
図書委員会などにおける児童・生徒の活動の充実	
3 . 幼稚園	P . 2 0
読書活動の推進	
研修の充実	
読書環境の整備・充実	
3) 市民図書館	P . 2 0
図書館のシステム	
子どもへのサービス	
ヤングに対するサービス	
4) その他、市の行政機関	P . 2 1
児童福祉課・保健センター	
中央公民館	
青少年センター	
その他の行政部署	
5) 子どもの読書活動の目標	P . 2 2
6) 啓発・広報	P . 2 3
第4章 計画の実現に向けて（取り組み方法）	P . 2 3
1) 推進体制、支援体制	P . 2 3
2) 「香芝市子ども読書活動推進実行委員会」の発足	P . 2 4
3) 計画の実施期間	P . 2 4

策定にあたって

日本は現在、急速に少子高齢化が進行しております。この傾向はまだまだ続きそうですが、日本の将来を考えますと、国家、社会にとどまらず、国民・市民の日常の生活にも大きく影響のある重要な課題です。

そのため、各方面で、子育て支援の施策が行われておりますが、子どもが健やかに育つことを願って現状をかえりみまると、子どものこころの荒れや感情の暴発などの現象が深刻化する状況もございます。

これは一つには、自分を表現する「ことば」を持たず、考え判断する言語の習得が不十分だからではないかと考えられています。つまり、大人も子どもも本や活字を読まなくなった読書離れと無関係ではありません。

そこで、香芝市教育委員会では、子どもに読書の“味”を知ってもらうべく、「子どもの読書活動の推進に関する法律」の要請を受けまして、平成19年度、「香芝市子どもの読書活動推進計画」の策定に取り組みここに成果をえましたのでお知らせします。

ネットワーク化する高度情報化社会にあっては、先の法に明記されておりますように、“ことば”が重要な働きをします。ことばは、知識の検索や情報の伝達だけでなく、喜怒哀楽の感情の表現から高度な志向や判断にまで関わっています。さらに、地域文化の記録や保存、あるいは、時代を超えてコミュニケーションを図りメッセージを送る手段ともなります。

ことばは子どもの頃より読書によってよりよく培われていきます。読書はまた、子どもに他の手段やメディアにはない、自分だけの想像の世界に遊ぶ“楽しみ”をもたらしてくれます。赤ちゃんから高校生に至るまで、子どもにことばをはぐくみ、読む喜びによって豊かな精神力を養成するには、幼い頃からの読書の習慣づけが不可欠であります。

香芝市では、子どもが読書に親しむことの意義を認めて、赤ちゃんから中高校生までを対象として、子どもの読書活動の推進に努めて参ります。

平成 20 年 3 月

香芝市教育委員会

教育長 山田 勝治

香芝市子ども読書活動推進計画

はじめに

いかなる社会においても、常に、次代を担う子どもの育成には力を入れてきました。子どもの育成は、いつの時代にも生活の中で子どもを鍛え、その多くは言葉を通して行われてきました。

歴史上、文字が発明され、本が現れると伝達は飛躍的に早く確実にになり、本は教育や教養、楽しみ、さらには調べ物に使用されるようになりました。あらゆる社会で本を読む人が増えていき、それに従って文化文明が発展していきました。

現在、近代化した社会にあっては、生活のなかに本が定着し、多くの子どもの本が出版されています。そして、子どもも大人と同じように本を読むことで、楽しみ、調べ、学んでいます。子どもが持って生まれた自分らしさを発揮し、自分らしく生きていけるよう援助することは、社会の努めとなっています。それには読書能力をつけることが不可欠であると思われれます。そこで、子どもに言葉を語りかけ、文字を教え、本を読めるように導くことが必要です。こうして本を読めるようになることで、子どもは自分で自分を知り、自分で読むことをおぼえ、自分を高めていき、人々と交わるのです。このように、子どもが読書をすることで獲得するものは多いといえます。

第1章 基本方針

「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである。すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」

このように「子どもの読書活動の推進に関する法律」(平成13年法律第154号)で定められており、これが基本理念です。

香芝市は、子どもの読書が子どもの成長に果たす役割を認め、この理念のもと、法が求める基本となる計画を定め、あらゆる市民に子どもの読書の重要性を啓発し、市民と共に、あらゆる子どもを視野に入れて、法が求める読書活動の実施を目指していきます。また、そのための条件や環境の整備につとめ、組織作りをはかっていきます。

なお、本計画における「子ども」とは、おおむね18歳以下を対象とします。

第2章 香芝市の子ども現状と課題

香芝市は奈良県の西北部に位置し、金剛生駒山系にある二上山のふもとのまちです。平成20年1月末現在、面積24.23平方キロメートル、人口73,745人です。

近年、住宅地の開発が進み人口が著しく増加しました。そのうち18歳以下は16,168人と、全体の約22%です。

香芝市は大都市大阪の近郊にあって、緑豊かで起伏のある地形に新興住宅地が点在し、自然環境、住環境に恵まれています。また、学校教育等においても、目立った授業妨害・学級崩壊などの荒廃がなく、子どもが健やかに育つ条件は整っているといえます。

〔子どもの育ち〕

現在、日本の子どもの現状は非常にとらえ難くなっています。即ち、衣食住、すべての面で、その育ちや日常生活が複雑化し、それを受けてしつけや教育においても考え方が多様化しています。そのため、家庭でも地域でも学校でも、その健全な成長発達を保障し、その子らしく育て立派な成人になるという道筋を確保することに混乱が生じています。

そのことについては、戦後の日本が短期間に経済、文化面で急激に変貌したことによるものと考えられています。終戦後の疲弊し困窮した暮らし振りが、国民の多大の努力によって貧困を改善し、暮らしを良くし、日常生活の向上を成し遂げました。

同時に、生産性の向上によって経済が発展し、所得倍増を実現し、余暇時間を生み出しました。その上、新しい教育観による教育が進展する中、国民の全般的な資質向上を受けて娯楽の多様化や大衆文化が開花しました。音楽、芝居、絵画、映画など芸術の鑑賞が進み、スポーツ、健康増進活動などに努め、海外に旅行して異文化に接する人も増えました。

これらはすべてが子どもの育ちに直接関わってきました。子どもの遊びや文化面で見れば、路地裏において異年齢の集団で遊んだ時代から、室内で少人数や一人で遊ぶことが通例になっています。つまり、子ども自らが創意工夫をこらして異年齢の集団で遊ぶことが少なくなって、パソコンやゲーム機など機器を介して遊ぶ傾向が強まっています。

また、少子化の影響からか、子育てに関する考え方も変わり、幼少時から稽古や習い事が盛んになりました。同時に、国情の発展に伴い教育に対する関心が高く、受験対応の早期化から知育・早期教育への関心が高まっています。その延長上に、小学生ではジュニアスポーツや芸能活動の活発化がありますし、高学年、中高校生の学習塾・予備校通いが一般化しています。

子どもの読書もそうした大きな潮流にのみ込まれています。子どもの読書は、読んでもらう「耳からの読書」を含むものですが、それには「ことばの獲得」が不可欠で

す。そのことばの獲得や習得の面で、子どもが育つ環境の異変が無視できなくなっています。生まれた直後から、感情のこもった人間の言葉より、テレビや物が発する機械音の方が先に耳に入りがちな環境が出来上がっています。つまり、人間らしい生きた言葉の環境が貧弱になってきています。

これは、日本人の生活スタイル全般の変化に伴い、都会ばかりではなく、これまで濃密な人間関係を誇っていた地方でも同じような状況が生じています。

〔香芝市における子どもの読書環境〕

香芝市では、昭和55年(1980年)に香芝町中央公民館を新設し館内に図書室を備え読書活動を開始しました。また、社会教育活動を進めて、いろいろな市民団体を育成し、その自主活動を支援する中で、子どもにお話を語る活動に取り組む「香芝お話ローソクの会」が生まれました。子どもに読書の楽しみを知ってもらうために活動をする団体の誕生といえます。その後、市内には、子ども文庫などの自主的な読書活動が起きました。

平成4年(1992年)、「ふたかみ文化センター」が開設され、その中に、本格的な読書施設として香芝市民図書館が開館し、市民に多様な図書・資料の提供を開始しました。読書の拠点ができたことで、子どもが気軽に本に親しむ公的な仕組みが、機能しだしました。このような図書館活動の中で、子どもの読書や子どもの本に関する講座、児童文学者の講演会、絵本学習会、読み聞かせ講習会などを多彩に開催し、市民・利用者の啓発啓蒙を行いました。この中から、読み聞かせやストーリーテリング(おはなしを語る活動)、ブックトーク(テーマを設定して本の紹介をする活動)など、子どもの読書活動を援助する市民ボランティアが育っていきました。現在、市民ボランティアによって活発に自主活動が行われています。

障害を持った子どもに対しては、市民ボランティア団体の手で製作された「布の絵本」(布を使って手作りされた絵本)や「さわる絵本」(主に視覚障害児向けに作られた、触って楽しむことのできる絵本)が市民図書館において利用に供されています。しかし、さまざまな障害を持った子どもに対しては、十分に手が届いていない可能性があります。

また、子育て支援施策の一環として、平成14年度より、生後4か月児の健診の機会に、親に絵本を読み聞かせることの意義や楽しさを伝えるとともに、絵本等を贈呈し、それによって親子の絆を深めることを目的とした「ブックスタート」事業に早期に取り組みました。

平成13年度(2001年度)には、学校図書館資源共有型モデル地域事業として、市内小中学校の図書のデータ化をはかり、これに加えて平成16年には学校図書館と市民図書館間に図書の配送システムの運用を開始しました。

このようにして、子どもの読書環境を適宜整えてきたことにより、平成17年(2

005年)4月には、市民図書館が、子どもの読書活動優良館として文部科学大臣より表彰を受けました。

香芝市では、以前から子どもの読書活動を推進してきましたが、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されたのを機に、基本となる計画を策定し、子どもの読書活動のいっそうの推進に努めることになりました。

1) 家庭・地域における現状と課題

香芝市では、子どもの荒れや学校の荒廃、地域社会における凶悪犯罪の発生など、子どもの育ちに好ましくない状況は現在著しくありません。市の中心になる市街化地区の形成が顕著ではないので極端な大型商業施設がなく、また、非行が起こりやすい場や状況が少ない状態です。

その上、比較的安定した家庭状況や地域状況があって、子どもの発達成長に適切な状況ですので、市民、行政、諸団体の連携による取り組みがなされるなら、活発な子どもの読書活動や、優れた子育て支援の施策が実施できると思われれます。

従来から、各家庭において適宜幼い子どもに読み聞かせなどが行われてきました。(アンケート調査結果参照)現在でも、子ども文庫活動やストーリーテリング活動、ブックトーク活動、バリアフリーのさわる絵本の創作・実践活動、朗読・群読活動(複数の読み手が声に出して本を朗読する)などが行われています。

子ども文庫活動

現在、市民活動としては、5文庫が市内で活動しています。

子ども文庫活動とは、自分たちで図書や施設を確保して、地域の子どものために図書の利用や貸出、さらに読み聞かせなどの活動を自主的に行う、子ども読書活動です。

図書の貸出だけでなく、おはなし・読み聞かせなど、いろいろな活動を行い、子どもの交流・憩いの場ともなっています。

子ども文庫活動といっても、全国にはさまざまな形態や設立目的のものがああります。一般の家庭の一室を開放している家庭文庫、地域の集会所で自主グループや自治会・婦人会などが行っている地域文庫、あるいは、塾や文化教室が一緒に行っている例もあありますが、利用する子どもが減少する傾向があります。

香芝市の子ども文庫活動では、お寺という空間的にゆったりした場で本や遊びを楽しむ文庫や、人形劇の活動を活発に行っている文庫、小学校へブックトークに行っている文庫、工作などを取り入れた活動をする文庫などがあります。このように、香芝市の子ども文庫でもそれぞれ季節に応じた取り組みを行っていますが、文庫に通う子どもは減りつつあります。

子ども文庫活動は少子化の影響が出る前から後継者不足や社会状況の変化などが影響して、活動は弱まり実数は減りつつあります。しかし、子ども文庫には子どもどうしや世話人との間に肌を触れ合うような密接な関わりが生じ、小規模ならではの温かい人間関係の中で本との関わりが出来ますので、一人ひとりの子どもに与える影響

は大きく、ここに子どもへの読書の関わりを働きかける原点があります。

ですから、子ども文庫活動は図書館を補完するという位置づけではなく、独自の子ども読書活動としてもっと評価され、行政支援の対象となってよいと思われます。子どもの読書が地域に根ざしていくことに、子ども文庫が果たす役割は大きいです。

子どもへの読書活動

香芝市においては、市民図書館設置以前から、「香芝お話ローソクの会」によって、子どもに“お話を語る”活動が行われていました。このような地道な活動が、図書館の開設やその後の子どもへの奉仕に関わり影響しています。

また、図書館開設以前から、幼稚園や保育所などでは、いつも読み聞かせや幼児にお話をする活動はなされていました。さらに、学校においても同様に、子どもに読書を勧めることは、国語科を中心に学校教育課程において、あるいは教師の個人的働きかけによってなされてきました。

これらは今も営々として継続して行われています。現在は、官民協働の市民活動として、赤ちゃん・幼児に絵本を読む会やブックトークの会など、さまざまな形で活発に行われています。これを継続して発展充実させていくには、子どもへの読書活動を支えるさまざまな学習活動が必要です。さらに、それを含めて子どもや読書に関する研究・調査活動が今後の課題となります。

「サークル ラ・ボ」という市民団体が、障害児に「布の絵本」や「さわる絵本」を製作する活動を現在行っており、この団体より寄贈を受けた図書館などで、利用ができるようになっていきます。また、同団体では、機会をとらえて展示や活動内容の紹介に努めています。

そのほかさまざまな障害を持つ子どもたちに対しては、社会福祉協議会が「ひまわり園」という事業活動を行っており、その中で幼児や小学生に本読みや図書の貸出が行われています。



さわる絵本

2) 学校における現状と課題

1. 学校図書館の整備

学校図書館の利用については、小学校では一人当たり年間約20冊の貸出冊数があるものの、中学校になると1～3冊へと大幅な減となっています。アンケート調査でも、読書をするにあたり、本の入手方法として、学校図書館で借りるという児童・生徒は、小学校では約60%みられたのが、中学校では約5%でした。

利用できる時間については、昼休みに開館している学校が多くを占め、曜日ごとに利用できる学年を決めて利用せざるを得ない状況も見受けられます。また、貸出などの業務は、主に図書委員が行っている学校が、半数以上を占めています。

環境整備

児童・生徒にとって、“図書室”から連想されるイメージが堅苦しいものであるためか、一部の児童・生徒が利用するにとどまっている様子も見受けられますので、誰でも気軽に来館できるような雰囲気作り・環境整備が求められます。

開館時間の拡大

学校図書館を利用できる時間について、昼休みや授業間の休み時間に開館している学校がほとんどで、いつでも好きな時間に自由に利用できるとは言い難いのが現状です。児童・生徒が学校にいる時間帯は、いつでも自由に利用できるように、開館していることが望まれます。



学校図書館利用風景

スタッフの配置

司書教諭の発令について、現在12学級以上の学校にはすべて発令されているものの、専任でないため、図書館業務に携わる時間が限られており、役割を十分に果

たせない現状です。司書業務の専任であることが望まれますが、現状では困難です。そこで、授業時間数の軽減をはかる等の工夫が求められます。また、学校司書の配置やボランティア等の活用による、学校図書館への「人」の配置が望まれるところです。

蔵書の充実

学校図書館は、学校教育を充実する目的で設置されており、子どもの学習に応えることのできる資料の充実をはかることが必要です。併せて、子どもの豊かな読書を支え活発にする上で、大きな働きをすることから、読書に対する欲求を満たすことのできる蔵書の整備が必要です。

しかしながら、現状は学校図書標準に達していない学校があったり、また、標準冊数を満たしてはいても、古い資料が多かったりするなど、質的には決して充分とは言えない現状があります。限られた予算内で、蔵書構成や選書の方法など、児童・生徒の要求を満たす資料を整えるための工夫について考える必要があります。

また、購入による収集以外にも、市民図書館による団体貸出の利用、他の学校との相互貸借などの推進もはかっていくことが望まれます。

学校図書館ネットワークシステム事業の充実・進展

ネットワークシステム事業により、市内14校すべての蔵書検索が可能です。同時に貸出資料の搬送を実施するなど、物流面もフォローしており、各学校と市民図書館との貸出については、環境が整ってきています。

しかし、すべての学校で活発に利用されているとは言いがたいのが現状です。また、利用している学校においても、校内での活用にとどまり、館外貸出をしている学校は限られています。

前項で述べましたように、蔵書の不足を補う側面もありますので、利用の促進と共に利用方法の拡大・進展が求められます。

また、市民図書館の資料の利用にとどまらず、今後は、学校間における相互貸借の実施、高校も含めた相互貸借の実施に向けての検討も課題といえます。



学校図書館コンピュータシステム

2. 学校における読書活動

学校全体での読書活動への取り組み

小・中学校すべての学校において、「朝の読書活動」を、小学校では毎週1回、中学校においては毎日実施しています。特に小学校においては、アンケート調査の結果、「朝読以外にも本をよく読むようになった」「本がおもしろいと思うようになった」と感じている児童が半数にのぼっており、朝の読書活動が読書に結びついていることがうかがえます。

また、市民図書館によるブックトークの実施や、ボランティアによるおはなし会を実施している学校、また各クラスにおいて総合学習や国語の時間を利用して読書活動を行うなど、各学校では読書活動に取り組んでいます。

しかしながら、指導体制による相違や指導者により相違があることは否めない現状です。こうした読書活動は、学校図書館や図書担当者だけに負うものではなく、学校全体での取り組みが必要です。そこで、すべての教員が読書活動の意義などについて、これまで以上に理解を深め、共通認識を持つことが求められるところです。

図書委員会など、児童・生徒の活動の充実及び促進

図書委員による活動は、各学校で展開・実施されています。

教員などによる読み聞かせや情報提供とは異なり、子どもたち相互の読書に関する情報交換や読み聞かせは、より読書に親近感を抱いてもらえるという面もあります。今後、委員会活動の内容を充実・活性化させると共に、さらに推進していくことが望まれます。

図書館教育研究会の充実

各小・中学校の図書担当職員による図書館教育研究会があり、読書教育について学校間の連絡・調整をはかると共に研修を深めています。また、市民図書館との連携を深めるべく定期的な連絡会を行っています。今後、さらに機能や活動を高めるための工夫が課題となります。

3. 幼稚園における現状と課題

市立幼稚園では、絵本コーナーが全幼稚園に設置されており、なかには空き教室を利用した絵本の部屋を設けている幼稚園もあります。また、多くの幼稚園が園児や保護者に対して、絵本の貸出を実施しています。ボランティアなどによるおはなし会も全幼稚園で実施されていますが、そうした行事だけでなく、保育時間中にも教員による読み聞かせが実施されているなど、子どもたちに対する読書活動の取り組みが、毎日の保育の一環として活発に行われています。

また、一部の幼稚園では、市民図書館の蔵書を活用した“絵本ひろば”という催しを実施し、時には未就園児も対象とした活動が展開されています。

しかしながら、市民図書館の資料の貸出にあたっては、現在のところ、学校を介しての配送となり、直接、幼稚園への搬送がなされていないのが現状です。幼稚園などへの、資料の搬送についても考えていく必要があります。

保護者に対する啓発活動は、各幼稚園で何らかの形で実施されています。ただその一方で、教員の読書に関わる研修の場が少ないという現状もありますので、そうした機会を増やすことも考えていく必要があります。



絵本ひろば

3) 市民図書館における現状と課題

香芝市民図書館は、基本方針のなかに、「本との出会い・人との出会い」を大切にし、だれでも使いやすい図書館をめざしており、6つの方針の中に、子どもの読書環境を整えて子どもの読書推進をはかるとしています。このようにして、子どもの読書の楽しみを知ってもらうために、さまざまな活動を行ってきました。

平成19年(2007年)3月末で、児童書の蔵書約53,000冊、児童書の年間貸出冊数194,480冊となっています。これは、同時点における子どもの人口16,061人に対して、一人当たり12.1冊で、成人児童あわせて市民一人当たり8.8冊に対しても、また奈良県下の他の自治体との比較でも、いずれも高い数値です。これらは、日常の子どもへの活動や学校などとの連携によって、効果をあげているものと思われます。

障害を持つ子どもへのサービスでは、啓発に努め門戸を開放しておりますが、実績はない現状です。また、先述の「布の絵本」「さわる絵本」を一般の利用に供しています。

利用状況及び登録率

平成18年度(2006年度)の0歳～18歳までの登録者数は約8,400人で、これは全体の約25.3%、貸出延べ人数は35,980人で、全体の約23.1%

にあたります。また、0歳～18歳までの貸出冊数は161,556冊で、全体の約25.6%、年間の新規登録者は平成18年度858人で、全体の約34.5%となっています。

行事・育児支援

定期的に開催している「おはなし会」の参加人数は、平成18年度(2006年度)で582人(1回の平均参加人数15.3人)でした。開館以来最も参加人数の多かった平成9年度(1193人/1回の平均参加人数23.9人)と比べると、50%以上の減となっています。この間の状況の変化があるとしても、今後の取り組み方の見直しなど、課題がみられるところです。

一方、平成16年度(2004年度)より開始した「えほんたいむ0・1・2」においては、平成18年度の参加人数は731人(1回の平均参加人数33.2人)、平成17年度より開始した「えほんたいむ2・3・4」においては、平成18年度の参加人数は242人(1回の平均参加人数24.2人)となっており、ほぼ毎回大勢の市民の方が参加している状況です。

これは、児童福祉課と連携・サポートする形で行なっているブックスタート事業のフォローアップが、現時点では一定の成果をあげているものといえます。このような形での、子育て支援を見据えた図書館サービスについては、市民の需要も高いことから、今後は、よりいっそうの乳幼児サービスの充実が求められています。

学校との連携

学校への読書支援事業として、香芝市においては学校図書館ネットワークシステムがあります。これによって、コンピュータシステムや物流システムを通じて、調べ学習や朝の読書活動など、さまざまな読書支援を行っています。

しかし、現実としては各学校の学習内容や、児童に課した学習課題等の情報把握が市民図書館ではできにくいため、学校や児童に対して十分な資料提供ができていないという問題があります。

このため、学校と図書館との間で、資料の貸出や連携を調整する役が必要です。特に、郷土についての調べ学習の場合、そもそも児童向けの郷土資料の存在自体が乏しいため、今後は子どもの学習に適した郷土資料に関する資料づくりなども必要になっています。

また、ブックトークは、学校への重要な読書支援の一つであります。市民図書館では平成18年度(2006年度)、小学校全10校中6校、中学校全4校中1校へ訪問して、この活動を行いました。平成19年度はさらに2校増加しました。

活動人員の育成と確保

ブックトークの需要増大に象徴されますように、図書館における対外サービス(学

校・幼稚園・保育所等)の拡充が必要になってきています。つまり、活動ができる人員数の確保です。これには、ボランティア等の養成を含めて人材育成が欠かせません。

また、これら児童サービス全般の充実が求められていることから、児童サービス担当職員の育成が早急な課題です。さらに、ブックトーク実施校の増加、あるいは、幼稚園における「絵本ひろば」という催しの実施などに伴う団体貸出の増加により、今後は、さらなる資料の充実が不可欠です。

中高校生(13歳～18歳の年齢層)への読書活動

市民図書館では、中高校生への働きかけは、ヤング・アダルトサービスとして実施しています。別にスペースを設け、緩やかに蔵書の構成を変え、定期的にテーマを掲げて特集展示などを行っています。

また、中学校へは団体貸出や課題学習に応じる旨のPRを行っています。取り組み実績は、限られていますが、先に述べましたように、最近、中学校へブックトーク活動をする事例が出てきました。

小学生から中高生になるにつれて、読書量や図書館利用が顕著に減少しています。(アンケート調査結果参照)多くの子どもたちが、小学生のころに比べると、塾やクラブ活動などに費やす時間が大幅に増加し、それに伴って読書をする時間が減少する傾向にあるといえます。また、学校図書館や読書自体に対する、この世代特有の抵抗感も、少なからずあるものと思われれます。

しかしながら、読書をしない状況があっても、読書に対するイメージの転換は、図書館の課題として解決しなければならないものです。



ヤングコーナー



ブックトーク



えほんたいむ0.1.2



おはなし会

4) その他、市の行政機関

子育て支援における読書活動支援

[ブックスタート]

児童福祉課が主担当となって、香芝市保健センターにおいて、4か月児健診時に「ブックスタート事業」を市民ボランティアや市民図書館と連携、協働して行っています。

同事業は、平成14年度(2002年度)から始まっており、これを機に受診率の上昇が見られます。それと共に、赤ちゃんを持つ親や祖父母世代に刺激を与え、図書館利用へ受け継がれつつあります。ブックスタート事業は、大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科の調査報告によりますと、現在、良い評価ができます。(なお、同報告によりますと、ブックスタート事業そのものの実施期間が短いため、本来の意味においての成果を判断するにはもう少し時間をかけて経過を見る必要があるとなっております)

その他、同課所管の、子育て交流センターにおける「おうちのこうえん」(平成18年度の利用者数14,466人)や、香芝高校のクラブハウス内で行われている「こまどりこっこくらぶ」(平成18年度の利用者数1,254人)を含んだ「つどいの広場」事業、公立保育所の園庭や施設内で行われている「ぴよぴよくらぶ」「すくすくくらぶ」や「ほっとひろば」で子育て支援が行われています。

今後、これらの機会を利用した読書につながる活動の実施が課題です。



ブックスタート風景

保育所

保育所では、保育カリキュラムのなかで保育士による本の読み聞かせや、絵本の貸出が行われています。保育所は幼児の身体、精神すべての面で保護育成をはかる施設でありますので、その働きのなかで、精神面の成長に関わる、言葉かけや絵本を楽しむ取り組みを日常的に実施しています。子どもの読書は心身の発達成長に伴って楽しみが増しますので、それぞれの子どもの状況において読書が豊かになると、よりよく

人が育つといえます。

市内7公立保育所では、年齢別にごっこ遊びやトイレのしつけ、食育など生活面で、保育の導入に絵本を使っています。このような絵本を通した活動が行われており、その広がりもみられます。保育所便りなどを使って保護者への啓発がどの保育所でも行われています。それぞれの保育所では保護者やボランティアグループ、あるいは、「香芝お話ローソクの会」などが読み聞かせやお話などの活動を行っています。

その他、公的機関

学童保育所においても、施設内に本を備えて、児童が自由に読書出来る状態になっているところがあります。ここでは、指導員が機会をとらえて紙芝居をしたり、絵本の読み聞かせなどを行っている事例があります。学童保育にもその時々いろいろな支援活動があつて「香芝お話ローソクの会」も定期的にボランティア活動を行っています。

障害を持った子どもに対しては、社会福祉協議会が「ひまわり園」を月曜日から土曜日まで実施しています。この施設には65名の子どもがおり、学齢前の幼児は年齢別に、午前午後に分かれて通園しています。毎日10名を受け入れており、その中で、1～2冊の絵本の読み聞かせを毎日行っています。また、「ひまわり園」では固有の蔵書を持っており、希望する幼児には貸出を行っています。

さらに、小学生には土曜日の通園日に同様の活動が行なわれています。その活動の中で、年に2回程度、市民図書館を訪問しています。

中央公民館や二上山博物館などは、いつでもどこでもだれでも、日常生活上の課題を見つけて、学びたいときに学びたいことを学ぶという、生涯学習活動を支援するために設置されています。

子どもの読書活動を推進していくためには、地域住民のより身近な公共施設において本に親しみやすい読書環境は重要ですが、現状では、中央公民館においては図書室は設置しておらず、童話や絵本をはじめとする蔵書もなく、スペース的にも難しい状況にあります。これまでの取り組みとして、ストーリーテリングの講習会の実施、また、市民の自主学習として読書や読み聞かせ、お話活動についての学習が行われてきました。

さらに、香芝市総合福祉センター内における福祉図書館でも、児童書を蔵書としています。

5) 小・中学校における読書アンケート調査より

小学生への調査

1ヶ月の間に読む本の冊数について、全国平均（平成18年度9.7冊）に比べる

と2.8冊少ない6.9冊でした。傾向としては、3年生から6年生にかけて急激に冊数が減少しています。6年生(4.0冊)5年生(5.2冊)は、3年生(10.6冊)の半減となっているのが現状です。さらに、1ヶ月の間に読む本の冊数が0冊という児童の割合は、小学3年生で2.4%(21人)、小学4年生で4.7%(38人)、小学5年生で5.2%(38人)、小学6年生で10.3%(75人)となっており、こちらも学年を重ねるごとに増加しています。

「読む理由」について、各学年ともほぼ半数が「朝の読書活動」を挙げています。これは、市内の小学校における朝の読書活動の定着をあらわす反面、それ以外では読まない児童がいることも考えられますので、いかに朝の読書活動をきっかけに自分自身の意思で行う読書を促すことができるかが、これからの課題でもあります。

その点では、「本を買ってもらった」が2人に1人以上、「学校図書館でおもしろい本をみつけた」が3人に1人以上、「市民図書館でおもしろい本をみつけた」が4人に1人以上と、何かきっかけがあれば本を読む児童も少なくないということが見受けられます。

前述したとおり、1ヶ月の間に1冊も本を読まない児童も存在します。読まない理由については「本はつまらない」「なんとなく」といったもの以外にも、「習い事」「宿題」「スポーツ」などが多数挙がっており、現在における小学生の生活実態の中に読書が入り込む難しさがあるのではと思われます。

それでも、全体として「本が好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童が7割~9割近くを占めています。つまり、潜在的に本を読むこと自体には好意をもっていることが、うかがえる結果となっています。しかし、これについて3年生から6年生にかけて、「好き」「どちらかといえば好き」から「嫌い」「どちらかといえば嫌い」へと増加傾向が見られます。

どこの本を読むかという質問に対しては、「家にある本」を読む児童が8割近くあり、身近な本を手取る傾向があることが分かりました。割合としては少なかった「市民図書館の本」や「学校図書館の本」を、手に取ってもらうべく努力・工夫をすることは今後の課題ではありますが、家庭内にいつでも本を手取ることのできる環境が、子どもたちの読書の機会を生み出しているものであると思われます。

朝の読書活動による児童の読書に対する影響についてですが、「本が面白いと思うようになった」「朝読以外にもよく読むようになった」のように、直接読書につながる変化を40%から50%以上の児童が感じていることが分かりました。これは、朝の読書活動が読書への児童の潜在的な意欲に対して働きかけることに、一定の効果を表しているものと思われます。

中学生への調査

1ヶ月の間に読む本の冊数について、全国平均(平成18年度2.8冊)よりも0.4冊少ない2.4冊でした。しかし、朝の読書活動での読書を除くと、1.7冊とさらに下回っています。朝の読書活動を含めない場合に、1ヶ月の間に読む本の冊数が0冊という生徒の割合は、中学1年生で33.9%(206人)、中学2年生で34.8%(211人)、中学3年生で41.0%(249人)にものぼり、各学年で3割~4割も占めています。読む生徒と読まない生徒の格差が、大きく生じていることがよくわかります。

上記で0冊と答えた生徒に対して、「普段読みたいと思うときがあるか」という質問については、「はい」「いいえ」がそれぞれ50%ぐらいずついました。つまり、全体の3分の1の生徒は1ヶ月の間に全く本を読みませんが、そのうちの半数は、少なくとも読みたいという意思があるということはよくわかりました。それでも読まなかったという理由には、「読む時間(機会)がない」が圧倒的に多数を占めます。塾や勉強、あるいは部活動やスポーツ活動などの理由により、読書の時間を捻出することができないものと思われます。中学生の生活実態の中に、いかに読書の時間を組み入れることができるかが、今後の課題であるといえます。

全体として、「本が好き」「どちらかといえば好き」と答えた生徒が各学年とも7割以上を占めています。小学生と同様、潜在的に本を読むこと自体には好意をもっていることがうかがえます。しかし、「嫌い」「どちらかといえば嫌い」の生徒も2割前後おり、小学生と比べると格段に増加しています。

基本的に、本は買って(買ってもらって)読んでいることがわかります。それとともに、小学生と比べ、「図書館で借りる」「学校図書室で借りる」が大幅に下がっています。中学生になると、急激に図書館や学校図書室からは足が遠のいているということがうかがえます。

朝の読書活動については、中学校においても全校で実施をしています。しかし、朝の読書活動による生徒たちの読書への影響については、「本が好きになった」「朝読の時間以外にも本を読むようになった」のように、直接読書につながる変化は10%から15%と小学生と比べると極めて低い結果となりました。小学生と違い、朝の読書活動のみの読書活動で読書習慣を身につけるといふことの難しさがうかがえます。

最後に、小学生の頃と比べた読書量の変化について、「少し増えた」「とても増えた」が50%以上、逆に「とても減った」「少し減った」人は30%以下という結果になりました。中学生自身の感覚では、読書量は増加していると感じている生徒が多くいるのですが、しかし実際に1ヶ月以上で読む本の冊数は、6.9冊から2.4冊へと大幅に減少しています。このギャップの意味するところは何であるのかが分かれ

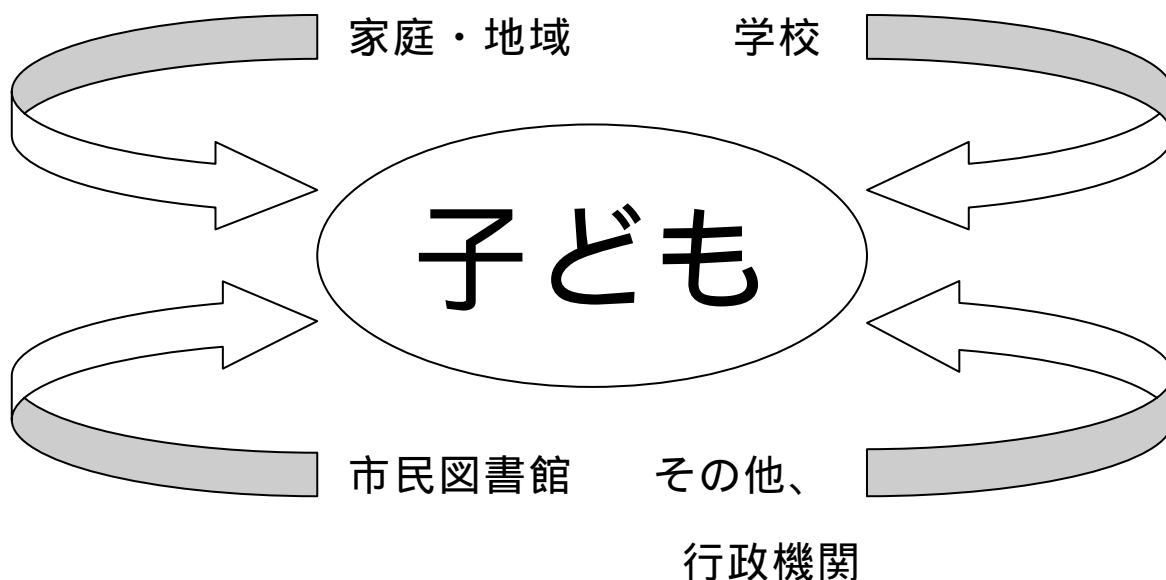
ば、中学生の読書離れの原因も少し解明されるのかもしれませんが。

第3章 具体的方策

香芝市における市民や行政の実情をもとに、子どもの健全な育ちに役立つことながら考えていくなかで、子どもの読書活動を活性化する取り組みを行います。

子どもの読書活動の推進に関する法律においては、子どもとは0歳から18歳をさしますので、幅広く赤ちゃんから高校生の年代までが該当します。同時に、健常児と共に心身に障害を持つ子どもを考慮に入れます。これは、何らかの点で読書にハンディキャップを持つ子どものことでもあります。

そのため、香芝市の各部署がそれぞれの領域で活動を活発化させます。それと共に、市民、市民団体、行政など、子どもに関わるあらゆる人が立場を超えて、共に香芝市の子どもの読書活動について具体的な活動の推進をはかっていきます。



1) 家庭・地域

無気力、反抗、深夜外出、家出、家庭内暴力など、現在子どもに起こっている、さまざまな好ましくない状況は、家庭をあたたくし、地域環境を良好にすることで改善が可能です。それには、家庭・地域において子どもを取り巻く暖かい人間関係をつくりだしていくことが必要です。そのなかで、読書という営みは心を癒す働きがあって、子どもを含めてあらゆる「個」としての人間を強く豊かにします。幼児には読み聞かせやお話の活動は人との信頼感を育み、その手立てとなります。いろいろな場において集団で行う読書は、人と人との交流があって人のつながりを強くします。

親子で読書を活性化する取り組み

親や祖父母を含めて、家庭における読書活動を活発にすることです。

これまでも、赤ちゃんや幼児のいる家庭では読み聞かせや語り聞かせが行われてきました。この意義を、地域社会という子どもが育っている場で、いろいろな人に広く知ってもらうことによって、地域における読み聞かせ活動が活発になり、さらに諸機関、諸団体などが共同して取り組んで、読書活動の定着をめざしていきます。

「家読（うちどく）」といわれる新しい用語が生み出されています。学校における「朝の読書活動」だけでなく、その前に「家で読む」ことを重要視したものです。一週間に一度、家族みんなと一緒に本を読み、読書の楽しみを身に付けて家族のコミュニケーションをはかろうとするものです。

家庭における定期的な読書を励行していくことは、香芝市でも取り組むべき課題となります。

地域社会の読書サークル活動、自治会、民間の読書活動

香芝市には、以前から子どもの読書活動に関わる団体が存在します。子ども文庫活動やおはなし・読み聞かせ、あるいはブックトークなどの活動を、ボランティア活動として行っている諸団体です。これらの連携をはかり、連絡を密にして、助け合って活動を支えあう仕組みづくりに取り組みます。

子ども文庫活動は本や場所の点では小規模ですが、それゆえに、個々の子どもに対応する密接な人間関係のよさがあります。読書を主にしながら、それに付随するいろいろな活動を行っており、子どもは遊びながら参加することが出来て、大人と子ども、子どもと子ども、大人と大人の交流の場にもなっています。子どもが地域に愛着を抱き、地域社会で育っていくことに果たす役割は大きいと思われれます。

そこで、このような市民の自主的な子ども文庫活動を支援し、その活発化をはかっていくことは、ふれあいの少なくなった子どもの現状を考慮に入れた場合、香芝市として取り組むべき事柄と思われれます。

また、ブックトークやストーリーテリング、読み聞かせなどの活動に関わる人を、さらに育成し組織して、香芝市における読書活動全体の活発化をはかっていくことが課題となります。

民間の読書活動を進めていくために、直接子どもの読書活動には関わらないまでも、間接面で活動を支える、人や団体を求めていきます。それには、自治会、自治会内の文化部、あるいは女性・婦人会などとの協力を得ることも検討していきます。

2) 学校

1. 学校図書館の充実

国の「子ども読書活動推進計画」にもあるように、学校図書館は、児童・生徒の自

由な読書活動や読書指導の場として「読書センター」としての機能と、児童・生徒の自発的、主体的な学習活動を支援する「学習情報センター」としての機能を果たし、学校教育の中核的な役割を担うことが期待されています。そうした役割を果たすため、学校図書館の整備・充実に向けて、地域や家庭の協力を得ながら、学校全体で取り組むことが大切です。

資料・環境の整備と充実

魅力ある学校図書館づくりに向け、親しみの持てる読書環境の整備に努めます。また、開館時間の拡大をめざします。

児童・生徒のニーズや関心を満たすため、蔵書の充実が求められていることから、学校図書標準の達成率の向上に努めると共に、蔵書構成や選書の工夫により、活用しやすい図書室をめざします。

人的配置の推進

司書教諭及び図書担当教員が、学校図書館の運営・活動に携わるために必要な時間を確保できるよう努めます。また、児童・生徒のニーズに応え、直接、情報提供や指導助言等を行うためには、人の配置が望まれます。

学校図書館ネットワークシステム事業の充実・進展

児童・生徒の多様な関心や、学習に必要なさまざまな資料要求に応えるため、団体貸出の利用の促進をはかると共に、今後は、市全体での蔵書の共同利用が可能となるよう、学校間における相互貸借の実施に向けて、検討を進めていきます。

また、団体貸出により借り受けた資料の活用について、館外貸出を促す等、活用方法の拡大を進めていきます。

2. 学校における読書活動の推進

児童・生徒が一日のうち、多くの時間を過ごす学校は、子どもの読書習慣を形成していく上で大きな役割を担っています。児童・生徒がより読書に親しめるよう、学校全体で読書活動の推進に努めていくことが求められます。

読書指導の推進と充実

市内すべての小・中学校で朝の読書活動が実施され、読書へのきっかけとなっていることがうかがえることから、今後も、継続した実施を推し進めていきます。

おはなし会や読み聞かせ、ブックトークの実施等、読書の楽しさを伝え、読書への関心を高める工夫への取り組みを進めます。

学校図書館の活用を促すとともに、児童・生徒の発達段階に応じた読書指導の推進に努めます。また、読書教育の推進に向けて、既存の図書館教育研究会の機能や活動の充実を努めます。

図書館委員会などにおける児童・生徒の活動の充実

読書活動を推進していくにあたり、図書館委員会活動も重要な側面を持ちます。

図書の貸出・返却等の業務や書架整理にとどまらず、図書だよりの発行など、活動内容の充実をはかります。

3. 幼稚園

幼児期に読書の楽しさと出会うため、子どもたちの発達段階をふまえた中で、読書活動の推進をはかっていくことが大切です。

読書活動の推進

保育の中で、読み聞かせなどの活動を積極的に取り入れるようにして、今後も引き続き、子どもたちへの読書活動の取り組みが活発に行われるよう推し進めていきます。それと共に、保護者やボランティア、市民図書館等との連携による読み聞かせやおはなし会などの読書活動の充実・推進をはかっていきます。

研修の充実

教員の絵本や読書に対する見識・理解を深め、保育活動に活かすため、研修の充実をめざします。

読書環境の整備・充実

本に親しめる環境の充実に向けて、現在、各幼稚園において設置されている絵本コーナーや絵本の部屋が、よりいっそう絵本に親しめるような場となるよう雰囲気づくりを進めます。

3) 市民図書館

図書館のシステム

子どもが日常の暮らしの中で読書や図書館利用を定着させるために、市内のどこに住んでいても図書館の利用が比較的容易に出来るような「図書館システム」の整備・拡充をめざします。

つまり、子どもが日頃、気軽に図書や資料に接し、入手できる「場」や「機会」を確保できるようにする必要があります。さらに、いろいろな条件の検討につとめ、分室・分館の設置を含めたサービスポイントの増設を、中・長期的な課題とします。

子どもへのサービス

子どもへのサービス活動の拡充、とりわけ、課題となっている乳幼児サービスの強化に努めます。市民図書館における実際面の働きについて広範な理解がすすむよう、子どもに関わる広範な類縁機関との連携・協力を拡大し強化します。

アニメーション（ブックトークに対話や遊びの要素を取り入れた、子どもと本を結びつけるための活動・方法）など、新しく開発された活動の技能を習得し活動の多様化をはかります。

障害を持った子どもへの読書活動では、「ひまわり園」との連携・協力をはかります。また、障害を持った子どもに対する読書活動の支援を実施していけるよう、関係諸部署、諸機関と連携や協力のあり方を模索していきます。

そのためにも、児童サービス活動を担える人材の確保をめざし、日常レベルで知識・技能の養成や研修を行います。

ヤングに対するサービス

13～18歳のヤングに対するサービスを意識して日常的に活動を行うようにします。読書離れをしているといわれる中高校生に、館内館外を含め、いろいろな生活領域で働きかけます。それには、学習塾など、子どもが集まっている場を視野に入れます。

また、中高校生の潜在力を引き出すために、読書サークル活動や図書館の体験活動（「一日図書館員」や「三日図書館員」）などに取り組みます。また、幼児・小学生への読書活動や読み聞かせ活動などに参加をはかります。

4) その他、市の行政機関

児童福祉課・保健センター

- ・現在行っている「ブックスタート事業」の継続をします。
- ・公立・私立の保育施設で、わらべうた、ことば、絵本など、将来の読書につながる働きかけに取り組んでいきます。
- ・他機関と連携・協力をはかっていきます。

中央公民館

- ・子どもや地域住民にとってより身近で、本に親しみやすい読書環境となるよう、図

書館や関係団体と連携・協力するとともに、イベントを開催する際には、パネル展示などを通じて普及・啓発を行います。

- ・読み聞かせ活動や読書活動を行っているサークルなどへの支援を行うとともに、子どもの読書を啓発する講座などを実施し、ボランティアサークルなどの組織化をはかります。

青少年センター

- ・適応指導教室において読書を通じて子どもたちの内面を潤し、図書館を利用する機会を増やし、本との良い出会いを進めるよう努めます。
- ・子どもたちに読書の奥深さを伝え、自らの言語表現を豊かにし、将来に向けた自分の展望を見いだせるよう支援していきます。読書体験を語り合い、常に新しい情報を提供し合い、ヤング層の心に響く読書活動を展開するよう努めます。

その他の行政部署

- ・「ひまわり園」(社会福祉協議会)における障害を持つ子どもへの働きかけの中で、読書活動をさらに推進するために、蔵書、資料の充実や本と結びつける方法など、関係機関との連携・協力を含めて模索していきます。
- ・子どもや子どもの読書に関わる事がらや催しなどにおいて、連携や協力を必要に応じて行います。
- ・主担する事業の企画・立案においても、子どもや子どもの読書の観点に配慮します。

5) 子どもの読書活動の目標

読書は子どもの精神的成長にとって大切なものですが、その量だけを求めるものではありません。また、名作・古典や良書といわれるものだけが子どもにふさわしいわけではありません。子どもの発達段階に応じながら、その時々興味関心にかなった適書が入り口となります。読書の目標はこういう点にも配慮して掲げていくことが必要です。いかなる場合も、子どもが本を楽しみ、読む喜びを体得できるように配慮することが大切です。

- ・子どもの読書意欲を高め、読書につながる取り組みに努めます。
- ・広く参加できる「読書サークル」活動の育成に努めます。
- ・自主的な子どもの読書活動団体の新たな育成に努めます。
- ・障害を持った子どもへは実情に即して読書活動を行います。
- ・在住外国人の子どもへの読書活動に努めます。

6) 啓発・広報

適宜、広範囲にわたり、さまざまな媒体や方法を使って、長期的・網羅的・戦略的に、子どもの読書に関する啓発を全市あげて行っていきます。

一般的な“読書”に対する固定的なイメージの転換をはかります。読書を幼児教育や子どもの学習・勉強の手段とする考え方、あるいは、中高校生にある、読書に対する“わだかまりやきまり悪さ”などのイメージを変える活動に広く取り組みます。

- ・子どもや子どもの読書に関わる人に役立つ子どもの読書啓発資料を作成して配布します。
- ・年齢や主題など、いろいろなテーマ別に、チラシ、冊子型など形式、形態は問わず本の紹介を定期的に行います。また、これらをインターネットでも配信します。
- ・香芝市のホームページの活用をはかります。
- ・子どもの読書に関する講座、講演会の開催に努めます。
- ・読書相談日を設け、子どもの読書ホットラインなど、読書に関するさまざまな相談に応じることのできる体制づくりに努めます。
- ・他の関係団体や機関と共同・共催もはかりながら、読書競技や創作活動などの意欲向上に努めます。また、必要に応じて子どもの読書に関わる活動の表彰や推薦を行います。
- ・社会における読書の啓発時期、つまり、「子ども読書の日」（4月23日）前後、「秋の読書週間」に啓発・広報を行います。

第4章 計画の実現に向けて

読書推進計画の実現は、子どもの読書が日常生活の中に位置付けられてこそ効果が期待できます。そこで、子どもに読書の定着をはかるために、子どもの読書環境を整えながら、適宜、創意工夫をはかって刺激や動機付けを行っていきます。

このように、読書推進計画をすすめていくためには、活動自体を担う組織体を構築する必要性があります。

1) 推進体制、支援体制

読書という営みが子どもの日常生活の中に定着し習慣となるためには、息の長い地道な取り組みが欠かせません。そのためには、親子、祖父母などの家族全体で取り組み、なおかつ、市民、行政・関係機関、民間団体を含めた幅広い実践が求められます。

そこで、計画実現のために官民協働の実践・実行組織を構築し、広く啓発と実践を行うものとし、その事務局を教育委員会・生涯学習課内に置きます。

実践していく中では、さまざまな課題が出てきますので、情報交換をはかり、適切な時に必要な事項を協議し決定します。

2) 「香芝市子ども読書活動推進実行委員会」の発足

「香芝市子どもの読書活動推進計画」策定後、組織の核となる部分を立ち上げます。組織は活動の状況に応じて整備していきます。

具体的には、参加可能な団体や人を募集して、実行委員会形式で組織します。

実行委員会で、実行について実務面の協議をします。

子ども読書の日（4月23日）など、子どもの読書に関わる時期や必要なときに、必要な活動を行います。

3) 計画の実施期間

この計画の期間は、平成20年度から24年度とします。

香芝市子ども読書活動推進計画

平成20年3月 発行

発行：香芝市教育委員会

用語解説

朝の読書活動・・・学校で子どもと教職員が、始業前に一定の時間、読書をする活動。どの本を読むかは、読む人が選ぶ。「朝の十分間読書運動」として、始業前に10分間、読書をするを、千葉県高等学校教諭が提唱、実践したのが始まりである。

家読・・・家庭での読書の略。1週間に1度、家族みんなが本を読む楽しさを身に付けようという趣旨である。家族で一緒に読書することによって、家族のコミュニケーションをはかることができ、家族の絆がさらに強くなることを願っている。出版物取次会社大手のTOHANAが提唱している読書推進運動。

えほんたいむ0・1・2・・・ブックスタートのフォローをはかると共に、市民図書館の乳幼児サービスとしての事業のひとつ。0～2歳児とその保護者を対象に絵本の読み聞かせを中心に手袋人形を使ったおはなし、手遊びをしている。絵本や手遊びなどを子どもと保護者に楽しんでもらい、家庭でも絵本を楽しむようになること、図書館での絵本等の利用の促進をはかるために行なっている。

えほんたいむ2・3・4・・・おはなし会の対象が3歳以上、「えほんたいむ0・1・2」の対象が0～2歳であり、赤ちゃんよりもう少し上の年齢で、おはなし会を楽しむにはまだ少し早い年齢層を対象とした会の実施を図書館でも検討していた。そこへ、このような会の要望が寄せられて行なうようになった図書館事業。2～4歳児とその保護者を対象に絵本の読み聞かせを中心に紙芝居、手遊びをしている。

絵本ひろば・・・絵本を、表紙を見せた状態で多数ならべ、子どもたちに自由に手にとってもらって楽しんでもらう催し。楽しみ方も自由で、自分で読む子どももいれば、互いに読み合っている子どももいる。読んでほしいという子どもには、会場に待機している何人かの読み手が、随時、その場で読み聞かせを行なう。実施にあたっては、市民図書館の蔵書を活用しているとともに、ボランティアの協力を得ている。現在は、主に幼稚園で実施している。

おうちのこうえん・・・香芝市総合福祉センター内にある、子育て交流室の愛称。屋内の公園で平日の午前9時から午後5時まで、自由に利用できる。また、季節の行事、毎月のお誕生日会、子どものために小物を手づくりする「手づくり応援シリーズ」などを催している。つどいの広場事業のひとつ。

香芝お話ローソクの会・・・おはなし会を行なう、市民図書館ボランティアのグループ。市民図書館の他、保育所、幼稚園、小学校、学童保育所等へ、おはなし配達（外へ

出向いておはなし会を行なうこと)をしている。

学校図書館図書整備5か年計画・・・学校図書館図標基準を満たすように策定された計画。平成19年度から平成23年度までの「学校図書館図書整備5か年計画」は第3次めとなった。今回は「更新冊数分」という費目がつくられた。古くなった情報を含む図書や使われることにより傷んだ図書を廃棄し、新たに図書を購入することが認められたことになる。

学校図書館図書標準・・・文部省(当時)が平成5年に定めた、公立義務教育諸学校の学校図書館が学校の規模に応じて整備するべき蔵書数の基準。

学校図書館ネットワークシステム・・・平成13年度、香芝市が学校図書館資源共有型モデル地域事業(文部科学省奈良県委嘱事業)の関係協力機関に指定された。香芝市立の全小・中学校(全14校)の学校図書館の資料と利用者の情報をデータベース化し、コンピュータで貸出、返却、予約ができるようになった。また、自校の資料だけではなく、市内14校の資料を検索することができるようになっている。さらに、市内14校から市民図書館の資料をコンピュータで検索することができ、市内の公立全15校(小・中学校14校と高等学校1校)の学校と市民図書館で資料を相互に貸出、返却することができる。資料は毎週木曜日に搬送している。

群読・・・複数の読み手による朗読。国語教育研究大辞典(国語教育研究所編 明治図書)によれば「1960年代、木下順二氏を中心とする山本安英の会によって創出された古典の体験・鑑賞・音声表現による現代化の方法として出発した」とあり、比較的新しいことばで、定まったかたちが見られないようである。広辞苑(岩波書店)、広辞林(三省堂)にも、項目がない。

子ども読書の日・・・毎年、4月23日。「子どもの読書活動に関する法律」第10条に定めがあり、子どもの読書活動の重要性を鑑み、その意義をひろく知らしめる日。

子ども文庫・・・民間の個人やグループが、自宅や地域の施設に児童向けの図書をおき、主に近隣の子どもたちに貸出を行なう活動および組織。おはなし会やお楽しみ会を催すこともある。運営は地域のボランティア活動による。個人が自宅の一部を開放して行なうものが「家庭文庫」、自治会・婦人会などの集団が公民館や集会所など地域の施設を利用して行なうものを「地域文庫」といい、これらの総称を「子ども文庫」と呼ぶ。

さわる絵本・・・視覚障害者や幼児が手で触ることによって理解し、楽しむことができるように、絵本の絵の部分の布、毛糸、ビニール等を使って立体的に、かつなるべく元の絵本に忠実に作られた絵本。字の部分は大きく目立つ書体の文字と透明シー

トに打った点字を貼り、目の見えない子どもと、目の見える子どもが共に楽しむことができる。

司書教諭・・・学校図書館法（1953〔昭和28〕年制定）第5条1項「学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない」に基づき、設けられる職。教諭として発令されていることを前提として、さらに、「学校経営と学校図書館」など5科目10単位を修めた者が司書教諭としての発令を受けることになる。同法には有資格者が養成されるまでの経過措置として「学校には、当分の間、第5条1項の規定にかかわらず、司書教諭を置かないことができる」という附則がつけられていた。1997（平成9）年には、2003（平成15）年4月以降、12学級以上の学校には司書教諭を置かなければならない、という内容の法改正が行なわれた。

ストーリーテリング・・・昔話など覚えた話を、主に子どもたちに本などの資料を使わずに語り聞かせること。まだ文字を十分に読むことができない子どもでも、物語を楽しむことができる。また耳から聞くことばをとおして物語のイメージを描くことに習熟することは、活字をイメージ化し、物語を楽しむ力を養う。

つどいの広場・・・以下の4事業を実施している。子育て親子の交流、集いの場を提供すること。子育てアドバイザーが、子育てに関わる悩み相談に応じること。地域の子育て関連情報を、集まってきた親子に提供すること。子育ておよび子育て支援に関する講習を実施すること。主に乳幼児（0～3歳）をもつ子育て中の親が気軽に集い、うちとけた雰囲気の中で語り合うことで、社会からの孤立を防ぎ、精神的な安心感をもたらし、育児不安や憂鬱感の軽減をはかっている。また、地域の子育て情報を提供し、地域の人々に参画してもらい、地域全体での子育て体制を支援している。市内では香芝市総合福祉センター内のおうちのこうえん、香芝高校内の次代の親育成モデルルームがある。香芝高校では平成19年度より1年生の全生徒が家庭科のカリキュラムで、同ルームを訪れた親子との交流を楽しんでいる。次代の親育成モデルルームは、平成19年度に「こまどりこっこくらぶ」に改称された。つどいの広場事業を実施する場について、平成20年3月に旭ヶ丘地区に「子育て支援センター」が建設されるに伴い、国が提唱する各中学校区に1カ所の設置が実現することになった。

適応指導教室・・・すみれ教室。青少年センターにあり、学校に行けなくなったり、行きにくくなっている子どもたちが安心して過ごせる場となっている。それぞれの子どもに合わせて相談指導をしながら、学校復帰を願い、学習活動のほか生活体験活動も行なっている。また、不登校状態が続き、家に引きこもりがちな子どもたちの家庭を大学生が訪問して、「心の友」として不安や悩みを聞いて話し相手になる訪問指導（ハートフルフレンド制度）もある。

読書競技・・・読書感想文コンクールや読書感想画コンクールなど、読書に関わって競うこと、そのやり方。

読書へのアニメーション・・・スペインのモンセラ・サルト氏が、子どもたちに読書の楽しさを伝え、子どもが生まれながらに持っている読む力を引き出そうと、開発、体系化した読書指導のメソッドで、75の方法がある。(例 間違いさがし 登場人物の持ち物や服をあてるゲーム 予め分割した文章から、元の物語を組み立てさせるゲーム)それらの方法を使い、読書をゲームとして楽しみながら読解力・表現力・コミュニケーション力を育てる。

布の絵本・・・肢体不自由や知的障害などの、主として目の見える子どもたちのために、作られた絵本。キャンバス生地にフェルトを縫い付けていくアップリケに似た絵本で、絵の形・色は元の絵本の絵にほぼ忠実に作られている。さらに、マジックテープやスナップの利用で動かしたり、取りはずしたり、結んだりして楽しむことができる。

ひまわり園・・・障害者自立支援法のもとで、香芝市社会福祉協議会が実施している児童デイサービス事業。障害児に対し、日常生活における基本的な動作の指導、集団生活への適応訓練などを行なっている。

ぴよぴよくらぶ・すくすくくらぶ・・・香芝市立保育所の異年齢児交流。ぴよぴよくらぶは6ヶ月から2歳未満の子ども、すくすくくらぶは満2歳から就学前のこどもが対象。主に家庭で子育てをしている親子のためのくらぶで、親も子も地域での友達づくりをしたり、楽しく遊びながら活動の場を広げることができる。

ブックスタート・・・子どもが健やかに成長するためには絵本が必要であること、絵本の楽しさを伝え、親子で楽しい時間を過ごしてもらうために、絵本2冊と子育てハンドブック、図書館利用案内等をセットにした「ブックスタートパック」を手渡す。香芝市では4か月児健診時に、行なっている。

ブックトーク・・・ひとつのテーマでなるべく広い領域にわたる複数の資料を用意し、それらに関連づけながら紹介すること。本に親しむことを知らない子どもには読むきっかけとなったり、これまで親しんできた種類の本とちがった本や新しい分野にも眼を開かせ、読書の範囲を広げさせるきっかけとなる。また、同じひとつのテーマでもいろいろな本があり、様々なアプローチがあることを知らせ、聞き手の興味を広げることができる。

ほっとひろば・・・香芝市立保育所のリズム室を開放し、子どもが自由に遊ぶのを見守りながら、お母さん同士が気軽に子育てのことを話し合うことができる場となっている。

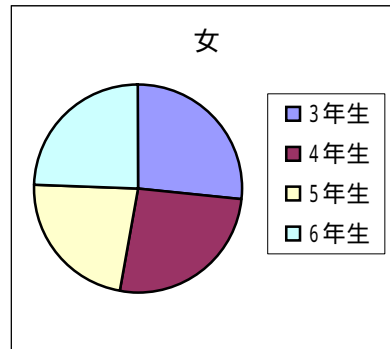
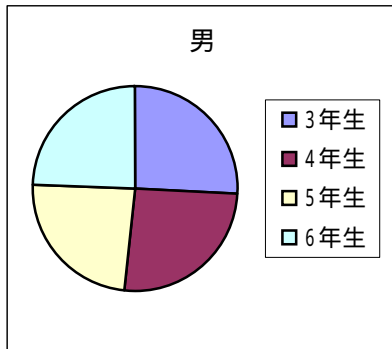
ヤング・アダルトサービス・・・13歳から18歳までの人達への図書館サービス。

13歳から18歳までの人達は児童と成人の中間に位置し、これから大人になろうとしている人達にふさわしい対応が望まれる。彼らの行動領域や関心は内面的にも対外的にも拡大し、ときには成人に匹敵する。一方、興味、関心が移ろいやすく、ブームや社会の変化に敏感である。読書にかぎって見るならば、成人向けの図書を自在に活用できるほど成熟してはいない。したがって、彼らの読書意欲を的確に受け止め、資料を収集し、整理し、読書案内をする必要がある。

香芝市子どもの読書実態調査(小学生)

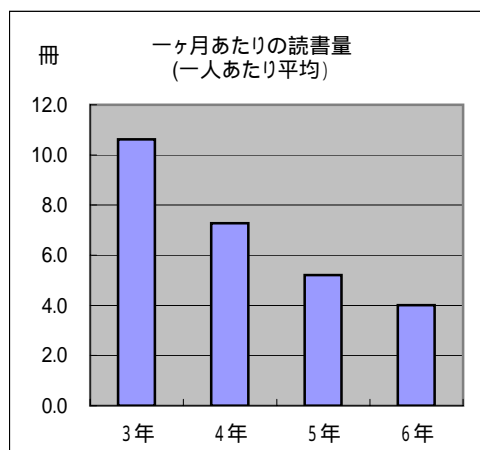
学年および性別

性別	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
男	425	422	393	400	1,640
女	420	415	361	386	1,582
合計	845	837	754	786	3,222



1ヶ月の間に、どのくらい本を読みますか？

	のべ冊数	一人あたり	回答者数
3年	8,974	10.6	845
4年	5,883	7.3	809
5年	3,770	5.2	724
6年	2,957	4.0	737
3～6年	合計 21,584	一人あたり 6.9	合計 3,115



学校読書調査による小学生が1ヶ月に読んだ書籍冊数

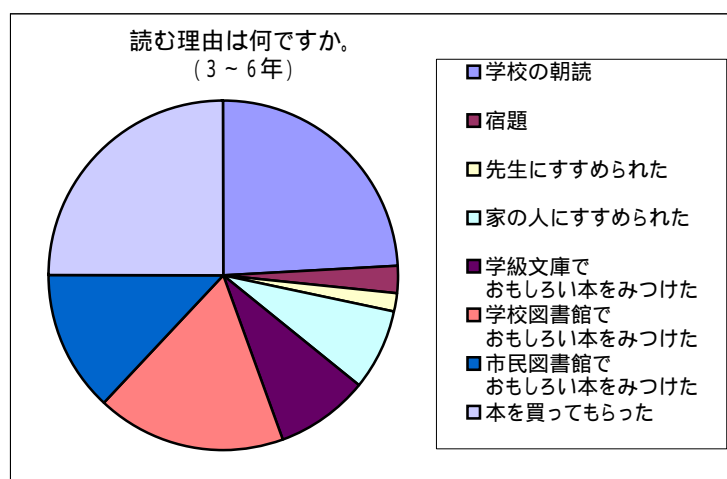
2005年度	7.7冊
2006年度	9.7冊

2006年度においては、香芝市は全国平均よりも一人当たりの1ヶ月の間に読む冊数は、2.8冊少ない。

- (1冊以上と書いた人) 読む理由は何ですか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
学校の朝読	431	394	382	441	1648
比率	51.0%	47.1%	50.7%	56.1%	51.1%
宿題	59	41	46	11	157
比率	7.0%	4.9%	6.1%	1.4%	4.9%
先生にすすめられた	20	36	39	27	122
比率	2.4%	4.3%	5.2%	3.4%	3.8%
家の人にすすめられた	141	136	140	96	513
比率	16.7%	16.2%	18.6%	12.2%	15.9%
学級文庫で おもしろい本をみつけた	152	162	133	121	568
比率	18.0%	19.4%	17.6%	15.4%	17.6%
学校図書館で おもしろい本をみつけた	349	363	292	198	1202
比率	41.3%	43.4%	38.7%	25.2%	37.3%
市民図書館で おもしろい本をみつけた	304	249	189	144	886
比率	36.0%	29.7%	25.1%	18.3%	27.5%
本を買ってもらった	402	480	405	405	1692
比率	47.6%	57.3%	53.7%	51.5%	52.5%

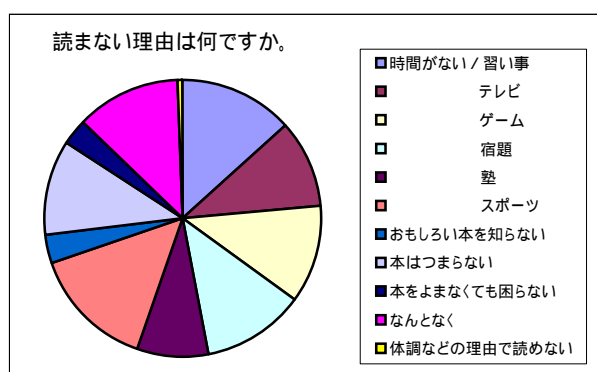
「学校の朝読」「本を買ってもらった」を読む理由に挙げる児童は、いずれも半分以上を占める。それに対して「学校図書館でおもしろい本をみつけた」「市民図書館で面白い本をみつけた」児童は1/3にとどまっている。



- (0冊と書いた人) 読まない理由は何ですか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
時間がない/ 習い事	16	12	20	23	71
テレビ	6	10	17	22	55
ゲーム	11	11	17	22	61
宿題	10	6	21	28	65
塾	8	9	10	17	44
スポーツ	12	21	23	21	77
おもしろい本を知らない	2	3	7	6	18
本はつまらない	5	7	8	40	60
本をよまなくても困らない	1	3	6	7	17
なんとなく	1	9	17	38	65
体調などの理由で読めない	1	1	0	1	3
合計	73	92	146	225	536

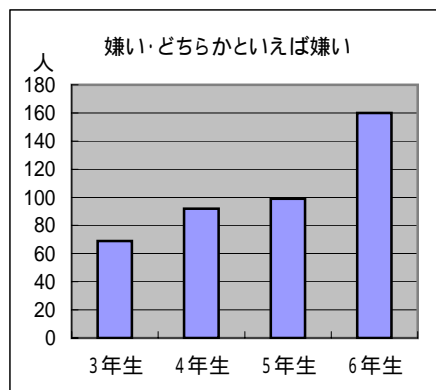
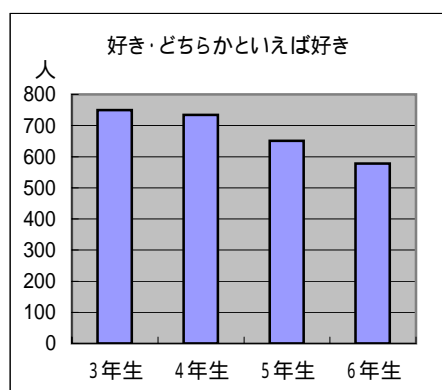
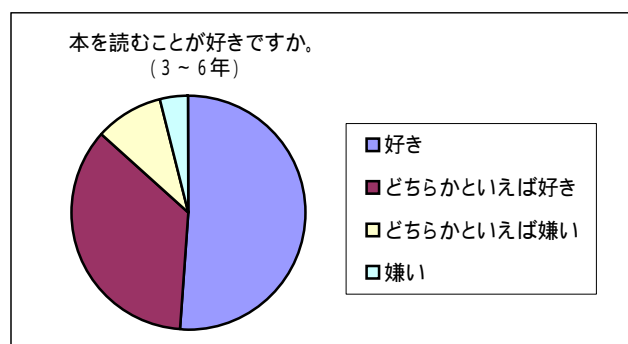
読まない理由の約半数が、習い事や塾、スポーツ活動などで時間がない事を挙げており、高学年になるほどその傾向は強くなる。



本を読むことが、好きですか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
好き	495	453	356	293	1,597
比率	58.6%	54.1%	47.2%	37.3%	49.6%
どちらかといえば好き	255	281	295	285	1,116
比率	30.2%	33.6%	39.1%	36.3%	34.6%
どちらかといえば嫌い	40	70	72	112	294
比率	4.7%	8.4%	9.5%	14.2%	9.1%
嫌い	29	22	27	48	126
比率	3.4%	2.6%	3.6%	6.1%	3.9%

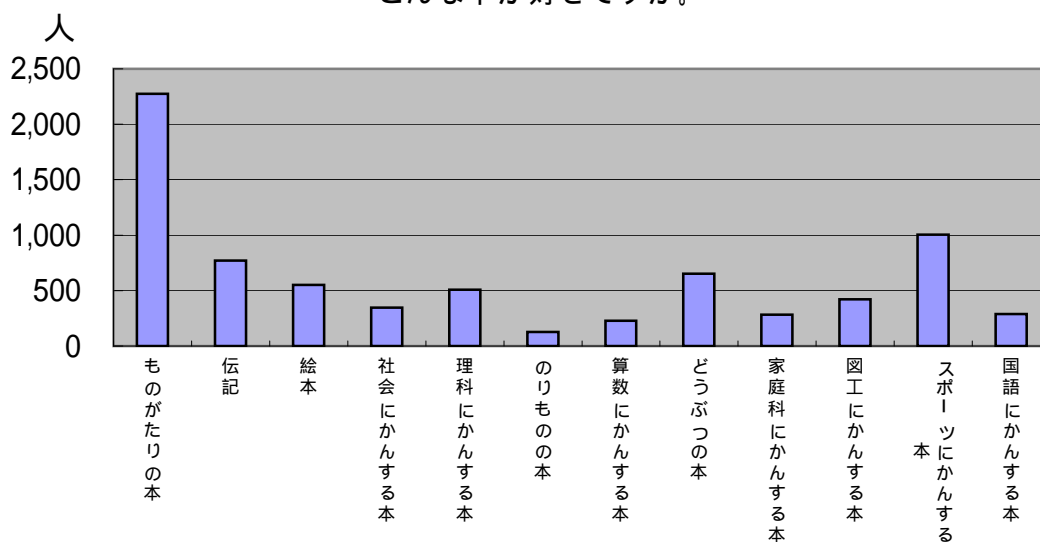
本を読むことが「好き」「どちらかといえば好き」という児童が8割を超えている。しかし、「どちらかといえば嫌い」「嫌い」という児童については、高学年になるほどその傾向は強くなっている。



どんな本が好きですか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
ものがたりの本	528	570	586	590	2,274
	62.5%	68.1%	77.7%	75.1%	70.6%
伝記	143	228	212	187	770
	16.9%	27.2%	28.1%	23.8%	23.9%
絵本	253	178	70	49	550
	29.9%	21.3%	9.3%	6.2%	17.1%
社会にかんする本	56	79	75	135	345
	6.6%	9.4%	9.9%	17.2%	10.7%
理科にかんする本	152	166	112	79	509
	18.0%	19.8%	14.9%	10.1%	15.8%
のりものの本	45	42	25	14	126
	5.3%	5.0%	3.3%	1.8%	3.9%
算数にかんする本	76	52	50	51	229
	9.0%	6.2%	6.6%	6.5%	7.1%
どうぶつの本	208	193	167	83	651
	24.6%	23.1%	22.1%	10.6%	20.2%
家庭科にかんする本	103	91	64	24	282
	12.2%	10.9%	8.5%	3.1%	8.8%
図工にかんする本	152	127	91	52	422
	18.0%	15.2%	12.1%	6.6%	13.1%
スポーツにかんする本	246	265	267	226	1,004
	29.1%	31.7%	35.4%	28.8%	31.2%
国語にかんする本	79	79	72	59	289
	9.3%	9.4%	9.5%	7.5%	9.0%

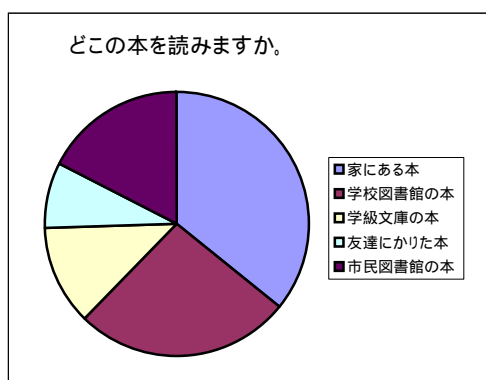
どんな本が好きですか。



どこの本を読みますか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
家にある本	648	702	602	607	2,559
比率	76.7%	83.9%	79.8%	77.2%	79.4%
学校図書館の本	500	592	444	359	1,895
比率	59.2%	70.7%	58.9%	45.7%	58.8%
学級文庫の本	233	245	204	185	867
比率	27.6%	29.3%	27.1%	23.5%	26.9%
友達にかりた本	115	164	136	165	580
比率	13.6%	19.6%	18.0%	21.0%	18.0%
市民図書館の本	448	342	242	221	1,253
比率	53.0%	40.9%	32.1%	28.1%	38.9%

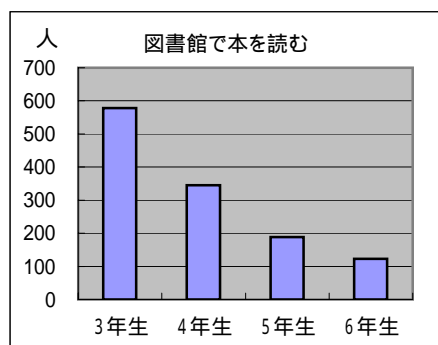
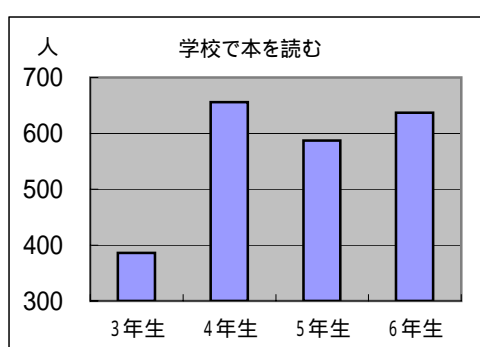
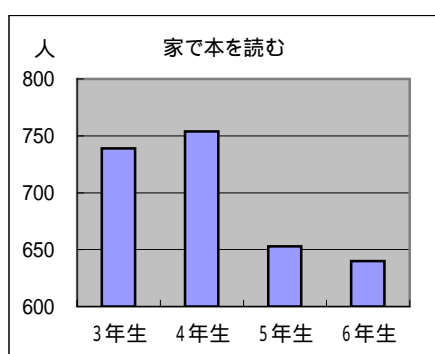
家にある本を読む児童が8割以上いる。市民図書館の本を読む児童は、高学年になるにつれて減少する傾向にある。



どこで本を読みますか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
家	739	754	653	640	2,786
比率	87.5%	90.1%	86.6%	81.4%	86.5%
学校	386	656	587	637	2,266
比率	45.7%	78.4%	77.9%	81.0%	70.3%
図書館	578	345	189	123	1,235
比率	68.4%	41.2%	25.1%	15.6%	38.3%

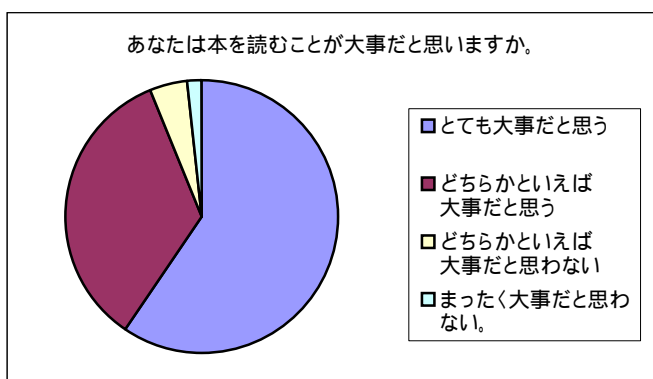
家で読む児童が大多数を占めている。図書館で読む児童は、高学年になるにつれて減少する傾向にある。



あなたは本を読むことが大事だと思いますか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
とても大事だと思う	592	503	424	346	1,865
比率	70.1%	60.1%	56.2%	44.0%	57.9%
どちらかといえば大事だと思う	215	260	272	339	1,086
比率	25.4%	31.1%	36.1%	43.1%	33.7%
どちらかといえば大事だと思わない	24	34	32	43	133
比率	2.8%	4.1%	4.2%	5.5%	4.1%
まったく大事だと思わない。	12	11	19	14	56
比率	1.4%	1.3%	2.5%	1.8%	1.7%

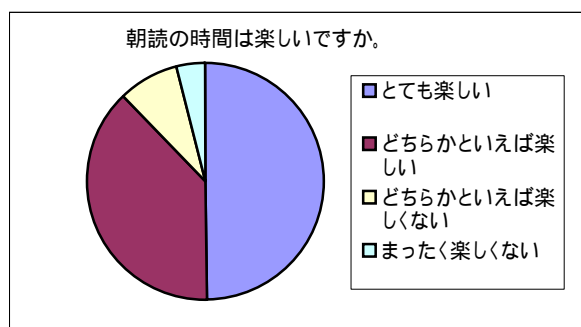
「とても大事だと思う」「どちらかといえば大事だと思う」と答えた児童は全体の9割以上にものぼっている。



朝読の時間は楽しいですか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
とても楽しい	533	449	328	244	1,554
比率	63.1%	53.6%	43.5%	31.0%	48.2%
どちらかといえば楽しい	258	277	308	338	1,181
比率	30.5%	33.1%	40.8%	43.0%	36.7%
どちらかといえば楽しくない	33	62	66	100	261
比率	3.9%	7.4%	8.8%	12.7%	8.1%
まったく楽しくない	16	31	34	43	124
比率	1.9%	3.7%	4.5%	5.5%	3.8%

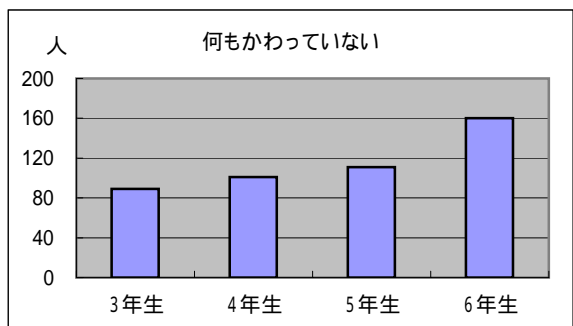
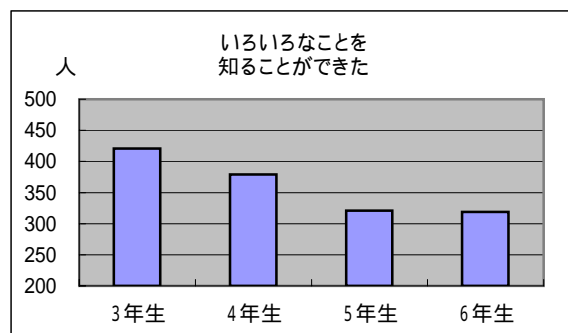
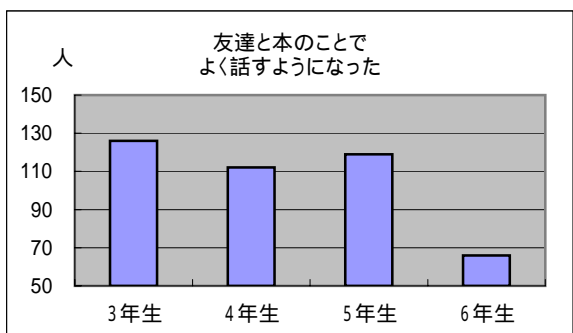
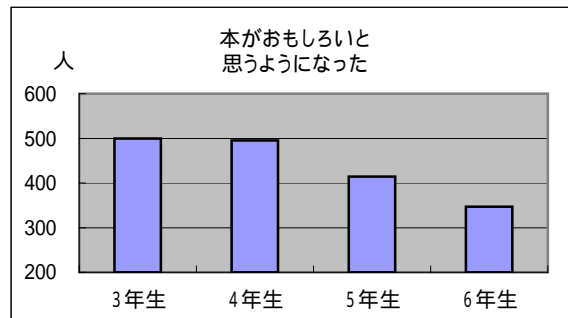
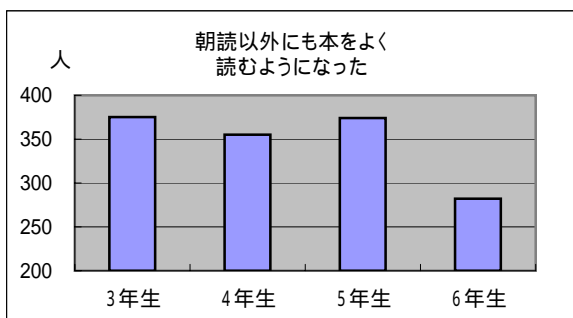
「とても楽しい」「どちらかといえば楽しい」と答えた児童は全体の8割以上を占めるが、高学年になるにつれて「とても楽しい」が減り、「どちらかといえば楽しくない」「まったく楽しくない」が増加する傾向にある。



朝読によって、何か変わったことがありますか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
朝読以外にも本をよく読むようになった	375	355	374	282	1,386
比率	44.4%	42.4%	49.6%	35.9%	43.0%
本がおもしろいと思うようになった	500	495	414	347	1,756
比率	59.2%	59.1%	54.9%	44.1%	54.5%
友達と本のことでよく話すようになった	126	112	119	66	423
比率	14.9%	13.4%	15.8%	8.4%	13.1%
いろいろなことを知ることができた	421	379	321	319	1,440
比率	49.8%	45.3%	42.6%	40.6%	44.7%
何もかわっていない	89	101	111	160	461
比率	10.5%	12.1%	14.7%	20.4%	14.3%

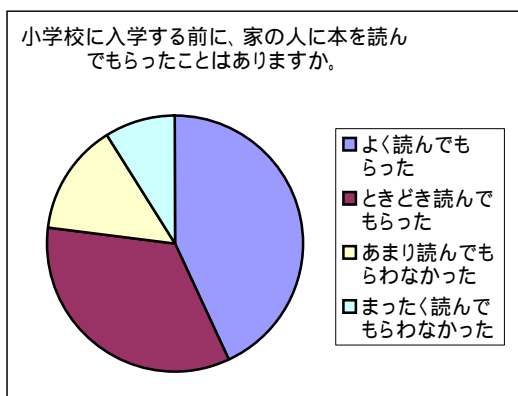
「朝読以外にも本をよく読むようになった」「本がおもしろいと思うようになった」と答えた児童が多かったが、高学年になるにつれて減少する傾向にある。



小学校に入学する前に、家の人に本を読んでもらったことはありますか。

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
よく読んでもらった	388	358	316	276	1,338
比率	45.9%	42.8%	41.9%	35.1%	41.5%
ときどき読んでもらった	266	285	250	256	1,057
比率	31.5%	34.1%	33.2%	32.6%	32.8%
あまり読んでもらわなかった	97	98	111	137	443
比率	11.5%	11.7%	14.7%	17.4%	13.7%
まったく読んでもらわなかった	79	72	65	60	276
比率	9.3%	8.6%	8.6%	7.6%	8.6%

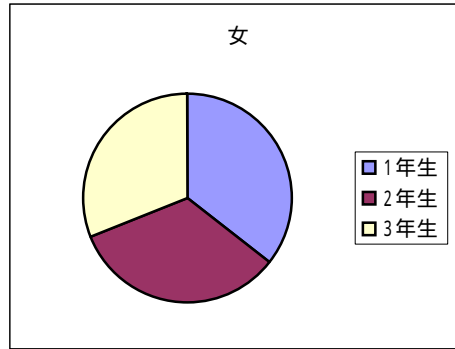
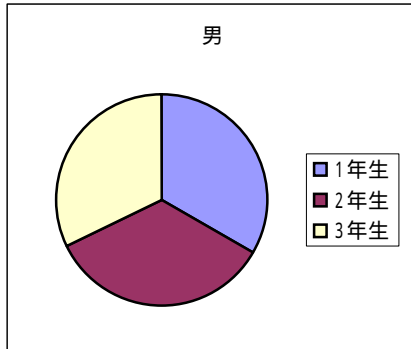
多くの児童が、入学前より家の人に本を読んでもらっている。



香芝市子どもの読書実態調査(中学生)

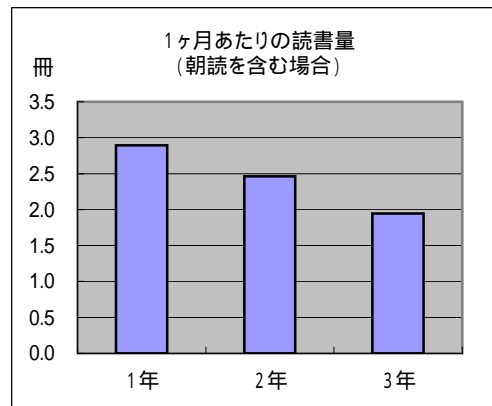
学年及び性別

性別	1年生	2年生	3年生	合計
男	322	331	311	964
女	340	317	297	954
合計	662	648	608	1918



あなたは、1ヶ月の間にどれくらい本を読みますか？(朝読含む)

	のべ冊数	一人あたり	回答者数
1年	1,906	2.9	659
2年	のべ冊数	一人あたり	回答者数
	1,580	2.5	642
3年	のべ冊数	一人あたり	回答者数
	1,179	1.9	606
1～3年	4,665	2.4	1,907



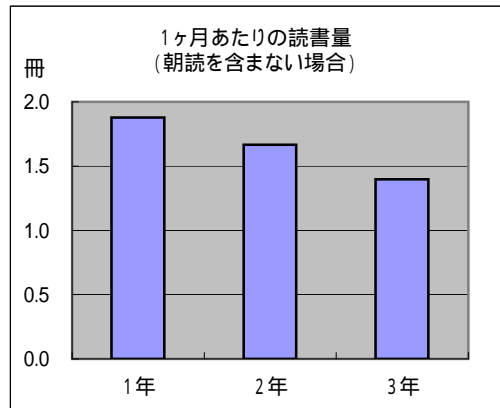
学校読書調査による中学生が1ヶ月に読んだ書籍冊数

2005年度	2.9冊
2006年度	2.8冊

2006年度においては、朝読を含んだ場合、香芝市は全国平均より、1ヶ月の間に読む冊数は0.4冊少ない。

あなたは、朝読以外で1ヶ月にどれくらい本を読みますか？

	のべ冊数	一人あたり	回答者数
1年	1,234	1.9	657
	のべ冊数	一人あたり	回答者数
2年	1,056	1.7	634
	のべ冊数	一人あたり	回答者数
3年	848	1.4	607
	のべ冊数	一人あたり	回答者数
1～3年	3,138	1.7	1,898



学校読書調査による中学生が1ヶ月に読んだ書籍冊数

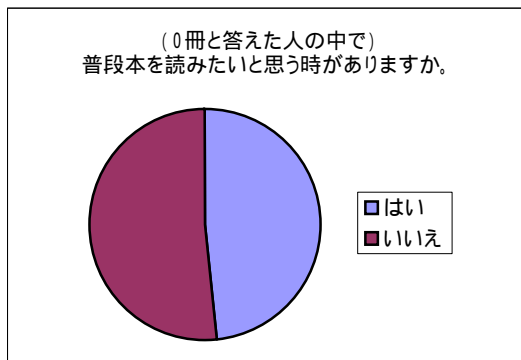
2005年度	2.9冊
2006年度	2.8冊

朝読を含まなかった場合、全国平均より1ヶ月の間に読む冊数は1.1冊少ない。

- (0冊と答えた方に)あなたは、普段本を読みたいと思う時がありますか。

	1年生 (206人中) (657人中)	2年生 (211人中) (634人中)	3年生 (249人中) (608人中)	合計 (666人中) (1899人中)
はい	100	102	120	322
比率	48.5%	48.3%	48.2%	48.3%
比率	15.2%	16.1%	19.7%	17.0%
いいえ	106	107	128	343
比率	51.5%	50.7%	51.4%	51.5%
比率	16.1%	16.9%	21.1%	18.1%

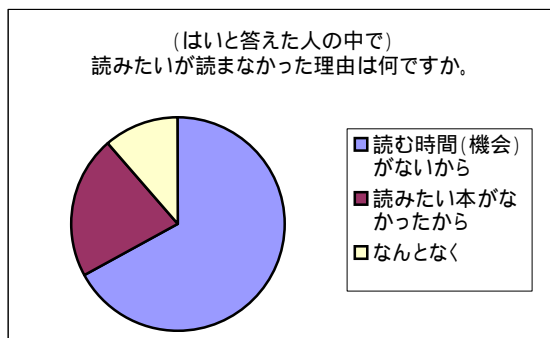
1ヶ月間に0冊と答えた生徒のうち、約半数の生徒が、本を読みたいと思うときがあると答えている。



- a (はいと答えた方に)読みたいが読まなかった理由はなんですか。

	1年生 (100人中)	2年生 (102人中)	3年生 (120人中)	合計 (322人中)
読む時間(機会)がないから	62	67	77	206
比率	62.0%	65.7%	64.2%	64.0%
読みたい本がなかったから	20	20	27	67
比率	20.0%	19.6%	22.5%	20.8%
なんとなく	10	11	14	35
比率	10.0%	10.8%	11.7%	10.9%

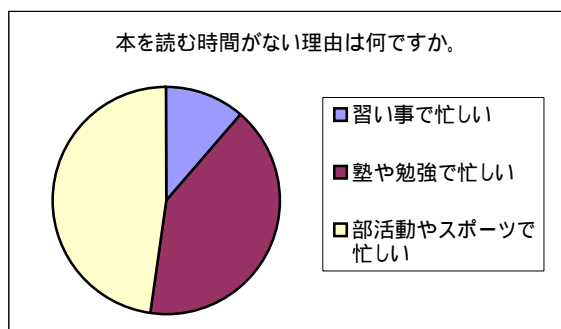
6割以上の生徒が、本を読まない理由として、読む時間(機会)がないことを挙げている。



- b (読む時間(機会)がないからと答えた方に)その理由は？

	1年生 (62人)	2年生 (67人)	3年生 (77人)	合計 (206人)
習い事で忙しい	9	10	11	30
比率	14.5%	14.9%	14.3%	14.6%
塾や勉強で忙しい	27	29	51	107
比率	43.5%	43.3%	66.2%	51.9%
部活動やスポーツで忙しい	43	39	44	126
比率	69.4%	58.2%	57.1%	61.2%

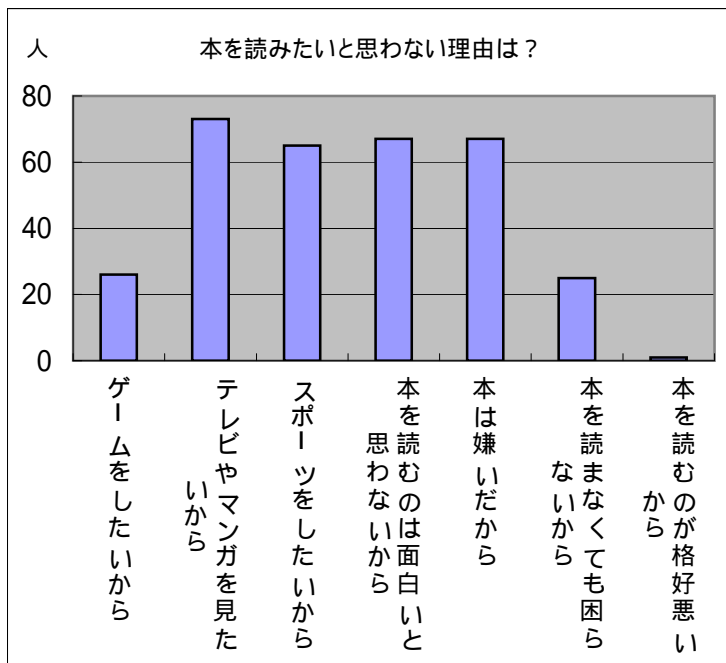
主に塾や勉強、部活動などにより本を読む時間がないという結果になっている。



- c (いいえと答えた方に) 読みたいと思わない理由は何ですか。

	1年生 (108人)	2年生 (107人)	3年生 (128人)	合計 (343人)
ゲームをしたいから	9	11	6	26
	8.3%	10.3%	4.7%	7.6%
テレビやマンガを見たいから	23	28	22	73
	21.3%	26.2%	17.2%	21.3%
スポーツをしたいから	19	24	22	65
	17.6%	22.4%	17.2%	19.0%
本を読むのは面白いと思わないから	10	23	34	67
	9.3%	21.5%	26.6%	19.5%
本は嫌いだから	26	8	33	67
	24.1%	7.5%	25.8%	19.5%
本を読まなくても困らないから	5	8	12	25
	4.6%	7.5%	9.4%	7.3%
本を読むのが格好悪いから	0	0	1	1
	0.0%	0.0%	0.8%	0.3%

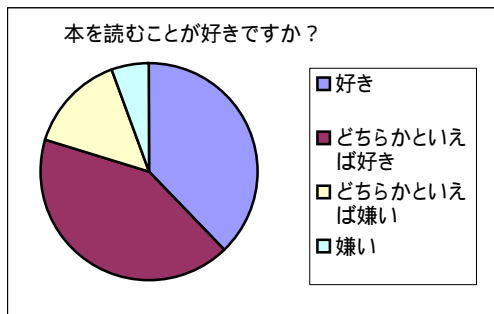
「本は嫌いだから」「本を読むのは面白いと思わないから」と答えている生徒は、上級生になるにつれて増加する傾向にある。



あなたは本を読むことが好きですか？

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	合計 (1918人)
好き	239	229	248	716
	36.1%	35.3%	40.8%	37.3%
どちらかといえば好き	279	289	224	792
	42.1%	44.6%	36.8%	41.3%
どちらかといえば嫌い	93	99	87	279
	14.0%	15.3%	14.3%	14.5%
嫌い	35	26	43	104
	5.3%	4.0%	7.1%	5.4%

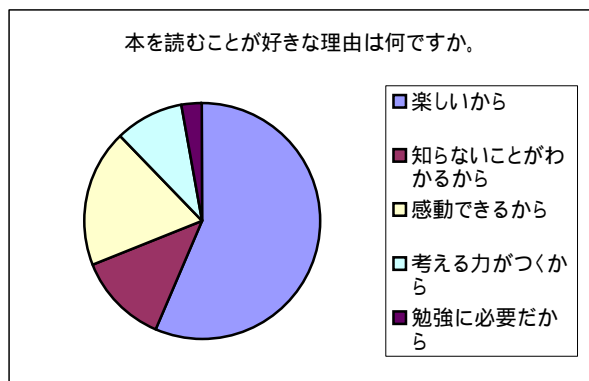
本を読むことが「好き」「どちらかといえば好き」と答えた生徒は8割近くを占めている。



- a (好き、どちらかといえば好きと答えた方に)その理由は？

	1年生 (518人)	2年生 (518人)	3年生 (472人)	合計 (1508人)
楽しいから	333	330	312	975
	64.3%	63.7%	66.1%	64.7%
知らないことがわかるから	76	69	68	213
	14.7%	13.3%	14.4%	14.1%
感動できるから	86	115	125	326
	16.6%	22.2%	26.5%	21.6%
考える力がつくから	53	49	60	162
	10.2%	9.5%	12.7%	10.7%
勉強に必要だから	18	15	17	50
	3.5%	2.9%	3.6%	3.3%

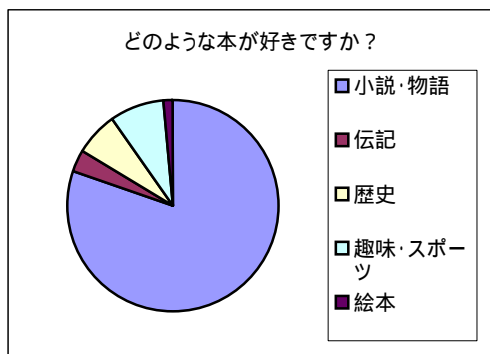
本を読むことは「楽しい」「感動できる」と思う生徒が多くを占めている。



- b どのような本が好きですか？

	1年生 (518人)	2年生 (518人)	3年生 (472人)	合計 (1508人)
小説・物語	467	463	435	1365
	90.2%	89.4%	92.2%	90.5%
伝記	24	19	12	55
	4.6%	3.7%	2.5%	3.6%
歴史	44	42	30	116
	8.5%	8.1%	6.4%	7.7%
趣味・スポーツ	45	50	46	141
	8.7%	9.7%	9.7%	9.4%
絵本	10	5	9	24
	1.9%	1.0%	1.9%	1.6%

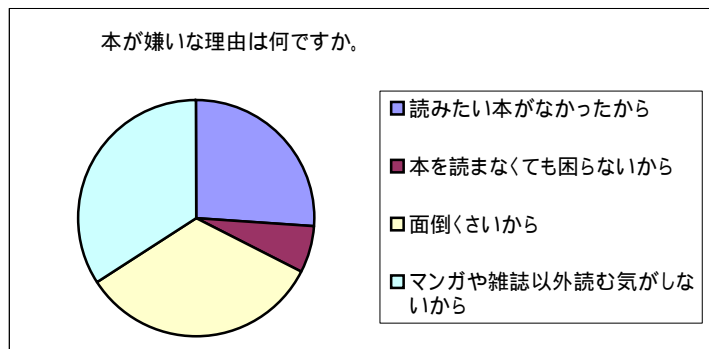
小説・物語が好きだという生徒が多くを占めている。



- (嫌い、どちらかといえば嫌いと答えた方に)その理由は？

	1年生 (128人)	2年生 (125人)	3年生 (130人)	合計 (383人)
読みたい本がなかったから	30	44	27	101
	23.4%	35.2%	20.8%	26.4%
本を読まなくても困らないから	7	9	8	24
	5.5%	7.2%	6.2%	6.3%
面倒くさいから	34	38	56	128
	26.6%	30.4%	43.1%	33.4%
マンガや雑誌以外読む気がしないから	51	38	43	132
	39.8%	30.4%	33.1%	34.5%

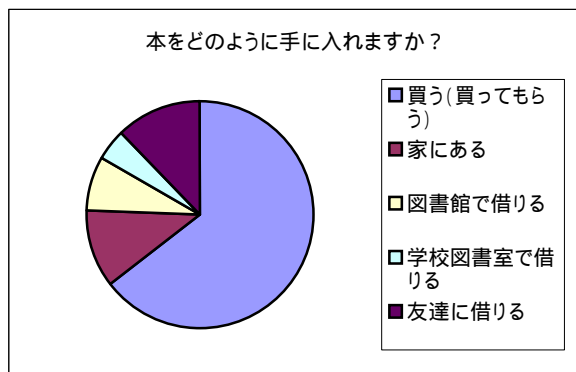
本を読むのが「面倒くさい」と答えた生徒は、上級生になるにつれて増加する傾向にある。また、本が嫌い
と答えた生徒の中で、「マンガや雑誌以外読む気がしない」と答えた生徒は1/3にもものぼっている。



本をどのように手に入れますか？

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	合計 (1918人)
買う(買ってもらう)	486	505	477	1468
	73.4%	77.9%	78.5%	76.5%
家にある	80	90	81	251
	12.1%	13.9%	13.3%	13.1%
図書館で借りる	65	56	60	181
	9.8%	8.6%	9.9%	9.4%
学校図書室で借りる	39	32	27	98
	5.9%	4.9%	4.4%	5.1%
友達に借りる	75	107	97	279
	11.3%	16.5%	16.0%	14.5%

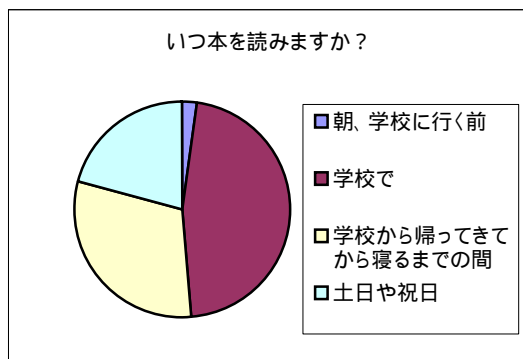
「買う(買ってもらう)」と答えた生徒が大多数を占める。市民図書館で借りて読むと答えた生徒は、小学生時と比べると激減している。



いつ本を読みますか？

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	(1918 人)
朝、学校に行く前	14	21	9	44
	2.1%	3.2%	1.5%	2.3%
学校で	298	398	251	947
	45.0%	61.4%	41.3%	49.4%
学校から帰ってきてから寝るまでの間	195	202	222	619
	29.5%	31.2%	36.5%	32.3%
土日や祝日	132	132	163	427
	19.9%	20.4%	26.8%	22.3%

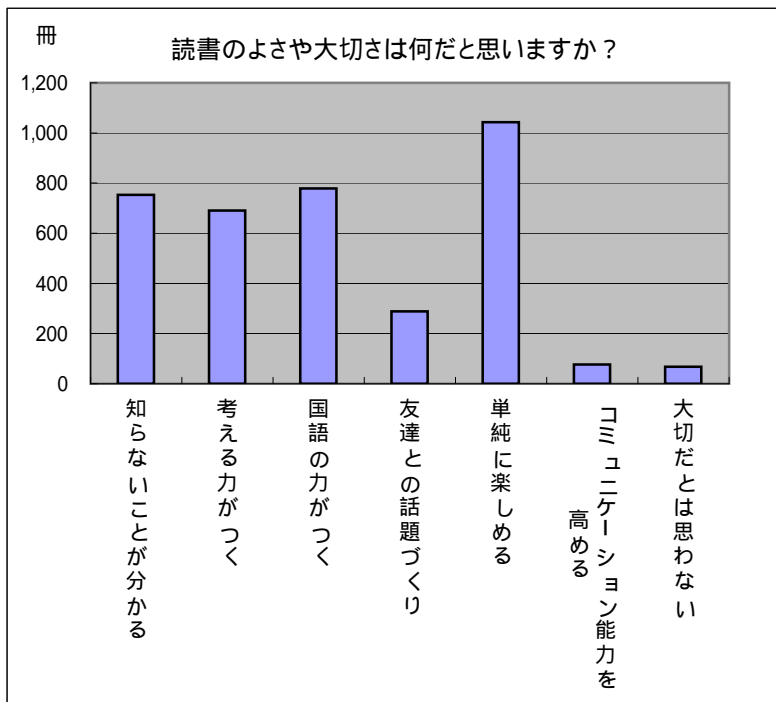
学校で(朝読で)読む生徒が半数近くを占めている。



読書のよさや大切さは何だと思えますか？(2つ以上 をつけてもよい)

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	合計 (1918人)
知らないことが分かる	278	253	222	753
	42.0%	39.0%	36.5%	39.3%
考える力がつく	252	217	222	691
	38.1%	33.5%	36.5%	36.0%
国語の力がつく	275	257	247	779
	41.5%	39.7%	40.6%	40.6%
友達との話題づくり	103	109	77	289
	15.6%	16.8%	12.7%	15.1%
単純に楽しめる	319	387	337	1,043
	48.2%	59.7%	55.4%	54.4%
コミュニケーション能力を高める	24	25	28	77
	3.6%	3.9%	4.6%	4.0%
大切だとは思わない	23	22	23	68
	3.5%	3.4%	3.8%	3.5%

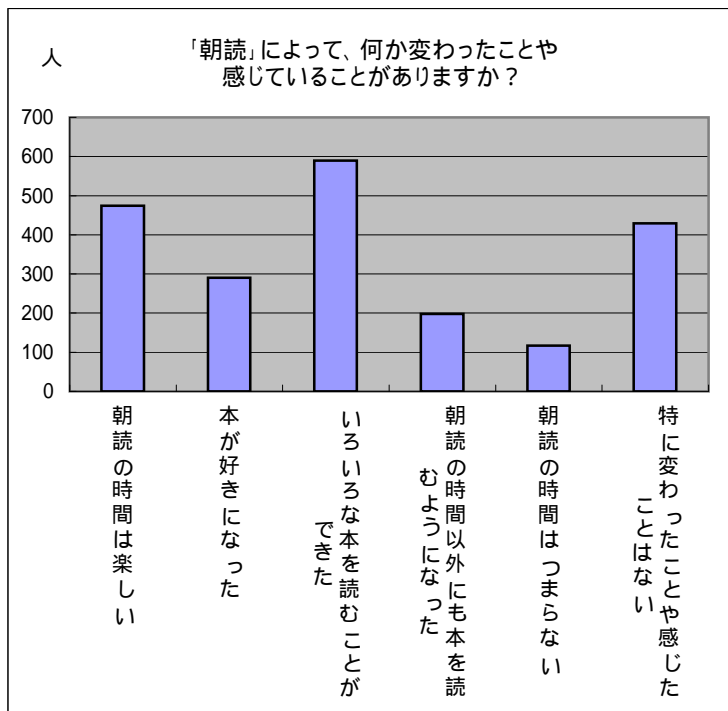
ほとんどの生徒が、何らかの理由で読書は大切であると認識している。



「朝読」によって、何か変わったことや感じていることがありますか？

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	合計 (1918人)
朝読の時間は楽しい	202	150	122	474
	30.5%	23.1%	20.1%	24.7%
本が好きになった	103	97	90	290
	15.6%	15.0%	14.8%	15.1%
いろいろな本を読むことができた	178	229	183	590
	26.9%	35.3%	30.1%	30.8%
朝読の時間以外にも本を読むようになった	68	62	68	198
	10.3%	9.6%	11.2%	10.3%
朝読の時間はつまらない	31	40	46	117
	4.7%	6.2%	7.6%	6.1%
特に変わったことや感じたことはない	140	137	152	429
	21.1%	21.1%	25.0%	22.4%

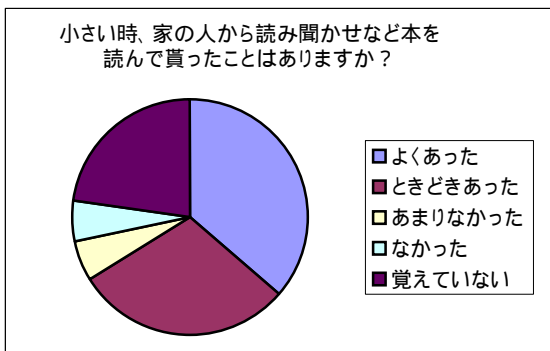
「朝読の時間はつまらない」と答えた生徒はわずかにとどまっている。しかし、「楽しい」と感じている生徒は、上級生になるにつれて減少する傾向にある。



あなたは小さい時、家の人から読み聞かせなど本を読んで貰ったことはありますか？

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	合計 (1918人)
よくあった	225	248	217	690
	34.0%	38.3%	35.7%	36.0%
ときどきあった	204	179	176	559
	30.8%	27.6%	28.9%	29.1%
あまりなかった	38	36	31	105
	5.7%	5.6%	5.1%	5.5%
なかった	41	40	24	105
	6.2%	6.2%	3.9%	5.5%
覚えていない	144	138	150	432
	21.8%	21.3%	24.7%	22.5%

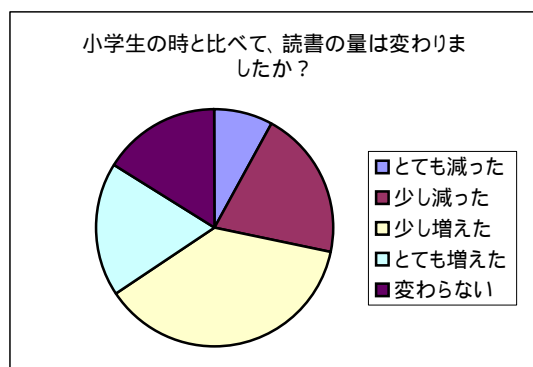
大多数の生徒が、「よくあった」「ときどきあった」と答えている。



小学生の時と比べて、読書の量は変わりましたか？

	1年生 (662人)	2年生 (648人)	3年生 (608人)	合計 (1918人)
とても減った	45	36	72	153
	6.8%	5.6%	11.8%	8.0%
少し減った	145	110	132	387
	21.9%	17.0%	21.7%	20.2%
少し増えた	282	248	176	706
	42.6%	38.3%	28.9%	36.8%
とても増えた	87	141	117	345
	13.1%	21.8%	19.2%	18.0%
変わらない	107	101	98	306
	16.2%	15.6%	16.1%	16.0%

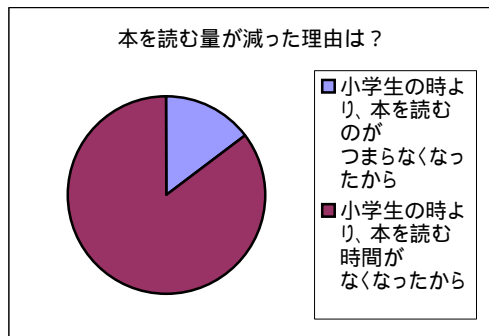
小学生の時より読書の量が増えていると思っている生徒が半数以上にのぼる。



- (とても減った、少し減ったと答えた方に)その理由は？

	1年生 (190人)	2年生 (146人)	3年生 (204人)	合計 (504人)
小学生の時より、本を読むのが つまらなくなったから	27	23	25	75
	14.2%	15.8%	12.3%	14.9%
小学生の時より、本を読む時間が なくなったから	155	115	167	437
	81.6%	78.8%	81.9%	86.7%

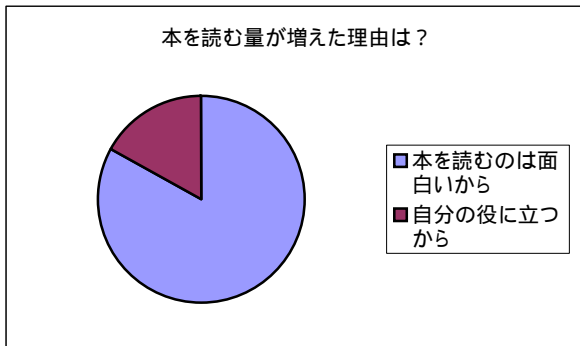
ほとんどの生徒が、小学生の時より時間がなくなったことを、読書の量が減った原因だと答えている。



- (少し増えた、とても増えたと答えた方に)その理由は？

	1年生 (369人)	2年生 (346人)	3年生 (293人)	(1008 人)
本を読むのは面白いから	258	295	220	773
	69.9%	85.3%	75.1%	76.7%
自分の役に立つから	57	55	45	157
	15.4%	15.9%	15.4%	15.6%

多くの生徒が、読書で得るものが「役に立つ」と感じるよりも、読書の「面白さ」をより感じている。



香芝市子どもの読書実態調査(小学校)より

読んでみてよかった本

平成年 19 年 7 月実施

【6年生男子】

1	21人	バッテリー(全6巻)	あさのあつこ	教育画劇
2	17人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ロリング	静山社
	17人	デルトラ・クエスト(シリーズ)	エミリー・ロッド	岩崎書店
4	13人	三国志	羅貫中	各社
5	12人	伝記		各社
6	11人	歴史に関する本		各社
	11人	星新一の作品		各社
8	7人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館
9	6人	シャーロック・ホームズ(シリーズ)		各社
	6人	少年探偵(シリーズ)	江戸川乱歩	ポプラ社
11	4人	ズッコケ三人組(シリーズ)	那須正幹	ポプラ社

その他、ルパン(シリーズ) (3人)

1票は、50タイトルを超える。学年が上がるほど、各人がそれぞれ自分の良かった本を持つ傾向が大きいように思われる。

【5年男子】

1	23人	マジック・ツリーハウス(シリーズ)	マリ・ホープ・ホルトン	メディアファクトリー
	23人	伝記		各社
3	12人	バッテリー(全6巻)	あさのあつこ	教育画劇
4	11人	歴史に関する本		各社
5	9人	野球の本		各社
6	8人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館
	8人	デルトラ・クエスト(シリーズ)	エミリー・ロッド	岩崎書店
8	7人	ズッコケ三人組(シリーズ)	那須正幹	ポプラ社
9	6人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ロリング	静山社
	6人	三国志	羅貫中	各社
	6人	少年探偵(シリーズ)	江戸川乱歩	ポプラ社
	6人	西遊記	呉承恩	各社

その他、フェアブル昆虫記 エジソン かいけつゾロリ(シリーズ) スポーツの本 (5人)
わずかではあるが、低学年に好まれる本が上がる。

【4年男子】

1	26人	デルトラ・クエスト(シリーズ)	エミリー・ロッド	岩崎書店
2	23人	マジック・ツリーハウス(シリーズ)	マリ・ホープ・バートン	メディアファクトリー
3	22人	かいけつゾロリ(シリーズ)	原ゆたか	ポプラ社
4	14人	伝記		各社
5	12人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社
6	11人	野球の本		各社
7	10人	西遊記	呉承恩	各社
8	9人	エジソン(伝記)		各社
9	8人	エルマー(シリーズ)	ルース・スタイルズ・ダネット	福音館書店
	8人	日本の歴史の本		各社
	8人	学研まんがでよくわかるシリーズ		学研

その他、怪談レストラン ミッケ(シリーズ) (6票)

昆虫(虫) 歴史 ズッコケ三人組(シリーズ) ファーブル(5票)

絵本がごくわずか上がってくる。

【3年男子】

1	33人	かいけつゾロリ(シリーズ)	原ゆたか	ポプラ社
2	22人	マジック・ツリーハウス(シリーズ)	マリ・ホープ・バートン	メディアファクトリー
3	10人	学研まんがでよくわかるシリーズ		学研
4	9人	昆虫の本		各社
	9人	野球の本		各社
	9人	伝記		各社
7	8人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社
	8人	デルトラ・クエスト(シリーズ)	エミリー・ロッド	岩崎書店
9	5人	さんねん峠	李錦玉	岩崎書店
	5人	怪談レストラン(シリーズ)		童心社
	5人	恐竜の本		各社

その他、ぐりとぐら エルマー(シリーズ) サッカー スポーツ(4票)

知識の本が良いとする生徒が一定数いる。女子にはない傾向である。

香芝市子どもの読書実態調査(小学校)より

読んでみてよかった本

平成 19 年 7 月調査

【6年生女子】

1	19人	伝記		各社
2	10人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ロリング	静山社
3	8人	ハッピーバースデー	青木和雄	金の星社
	8人	親指さがし	山田悠介	幻冬舎
5	6人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館
	6人	マジック・ツリーハウス(シリーズ)	メアリー・ホープ・ホルトン	メディアファクトリー
7	5人	IQ探偵ムー(シリーズ)	深沢美潮	ジャイブ
	5人	赤川次郎の作品		各社
	5人	ケータイ小説		各社
10	4人	星の王子さま	サンテグジュペリ	岩波書店
	4人	Fコース	山田悠介	幻冬舎
	4人	リアル鬼ごっこ	山田悠介	文芸社
	4人	若おかみは小学生!(シリーズ)	令丈ヒロ子	講談社

【5年女子】

1	22人	マジック・ツリーハウス(シリーズ)	メアリー・ホープ・ホルトン	メディアファクトリー
2	21人	伝記		各社
3	12人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ロリング	静山社
4	11人	ヘレンケラー(伝記)		各社
5	10人	若おかみは小学生!(シリーズ)	令丈ヒロ子	講談社
6	8人	怪談レストラン(シリーズ)		童心社
	8人	IQ探偵ムー(シリーズ)	深沢美潮	ジャイブ
8	7人	アンネ・フランク(伝記)		各社
9	6人	妖界ナビ・ルナ(シリーズ)	池田美代子	岩崎書店
10	5人	少年探偵(シリーズ)	江戸川乱歩	ポプラ社

【4年女子】

1	32人	マジック・ツリーハウス（シリーズ）	メアリー・ホプ・スミス	メディアファクトリー
2	30人	伝記		各社
3	11人	かいけつゾロリ（シリーズ）	原ゆたか	ポプラ社
4	8人	ヘレンケラー（伝記）		各社
5	8人	妖界ナビ・ルナ（シリーズ）	池田美代子	岩崎書店
6	7人	学研まんがでよくわかるシリーズ		学研
7	6人	赤毛のアン	L.M.モンゴメリ	各社
	6人	ランプの精リトル・ジーニー（シリーズ）	ミンダ・ジョーンズ	ポプラ社
	6人	怪談レストラン（シリーズ）		童心社
	6人	ハリー・ポッター（シリーズ）	J.K.ローリング	静山社
	6人	リトルバンパイア（シリーズ）	アグネス・ソナー・ホーデンブルグ	くもん出版

その他、ナイチンゲール ミッケ レミーのおいしいレストラン（5人）
 全般に、女子には流行の影響が少し強く出ている。

【3年女子】

1	7人	こまったさん（シリーズ）	寺村輝夫	あかね書房
2	6人	怪談レストラン（シリーズ）		童心社
	6人	マジック・ツリーハウス（シリーズ）	メアリー・ホプ・スミス	メディアファクトリー
4	5人	わかったさん（シリーズ）	寺村輝夫	あかね書房
	5人	さんねん峠	李錦玉	岩崎書店
	5人	もりはおもしろランド（シリーズ）	舟崎靖子	偕成社
	5人	かいけつゾロリ（シリーズ）	原ゆたか	ポプラ社
	5人	学研まんがでよくわかるシリーズ		学研
9	4人	ランプの精リトル・ジーニー（シリーズ）	ミンダ・ジョーンズ	ポプラ社
	4人	IQ探偵ムー（シリーズ）	深沢美潮	ジャイブ

この学年では、特定の作品に人気が集中するということは見られなかった。

香芝市子どもの読書実態調査(中学校)より

読んでみてよかった本

平成 19 年 7 月調査

【1年男子】

1	38人	バッテリー(全6巻)	あさのあつこ	教育画劇	ヤング
2	37人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社	ヤング
3	14人	デルトラ・クエスト(シリーズ)	エミリー・ロッド	岩崎書店	児童書
4	11人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館	児童書
5	11人	三国志	羅貫中	各社	
6	8人	ナルニア国物語(全7巻)	C.S.ルイス	岩波書店	児童書
7	7人	ズッコケ三人組(シリーズ)	那須正幹	ポプラ社	児童書
その他、3人以上					
		十五少年漂流記	J・ヴェルヌ	各社	児童書
		パイレーツ・オブ・カリビアン	R・キッド	講談社	児童書
		ブレイブ・ストーリー(上・下)	宮部みゆき	角川書店	一般書
		マジック・ツリーハウス(シリーズ)	メアリー・ポップ・オズボーン	メディアファクトリー	児童書
		リアル鬼ごっこ	山田 悠介	文芸社	ヤング

【2年男子】

1	35人	バッテリー(全6巻)	あさのあつこ	教育画劇	ヤング
2	27人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社	ヤング
3	12人	ブレイブ・ストーリー(上・下)	宮部みゆき	角川書店	一般書
4	11人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館	児童書
5	9人	パイレーツ・オブ・カリビアン	R・キッド	講談社	児童書
6	8人	佐賀のがばいばあちゃん	島田洋七	徳間書店	一般書
	8人	リアル鬼ごっこ	山田 悠介	文芸社	ヤング
	8人	東京タワー	川口松太郎	扶桑社	ヤング
9	7人	三国志	羅貫中	各社	児童書
その他、3人以上					
		博士の愛した数式	小川洋子	新潮社	ヤング
		手紙	東野圭吾	毎日新聞社	一般書
		ナルニア国物語(全7巻)	C.S.ルイス	岩波書店	児童書

【3年男子】

1	34人	ハリー・ポッター（シリーズ）	J.K.ロリング	静山社	ヤング
2	15人	バッテリー（全6巻）	あさのあつこ	教育画劇	ヤング
3	9人	ダレン・シャン（シリーズ）	ダレン・シャン	小学館	児童書
4	6人	星新一の作品		各社	
5	5人	デルトラ・クエスト（シリーズ）	エミリー・ロッド	岩崎書店	児童書
	5人	パイレーツ・オブ・カリビアン	R・キッド	講談社	児童書
7	5人	心霊探偵八雲	神永 学	文芸社	ヤング
	4人	バーティミアス（シリーズ）	ジョナサン・ストラウト	理論社	ヤング
9	4人	ブレイブ・ストーリー（上・下）	宮部みゆき	角川書店	一般書
10	4人	三国志	羅 貫中	各社	
	4人	佐賀のがばいばあちゃん	島田洋七	徳間書店	一般書
	4人	エラゴン（シリーズ）	クリスティアン・パトリック	エル・マガジンズ	ヤング

香芝市子どもの読書実態調査(中学校)より

読んでみてよかった本

平成 19 年 7 月調査

【1年生・女子】

1	76人	恋空(上・下)	美嘉	スターツ出版	携帯小説
2	29人	赤い糸(上・下)	メイ	ゴマブックス	携帯小説
3	24人	バッテリー(全6巻)	あさのあつこ	教育画劇	ヤング
4	21人	天使がくれたもの	Chaco	スターツ出版	携帯小説
5	17人	ハッピーバースデー	青木和雄	金の星社	ヤング
	17人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社	ヤング
7	16人	純愛	稲森遥香	スターツ出版	携帯小説
8	15人	1リットルの涙	木藤亜也	エフエー出版(幻冬舎)	一般書
9	9人	もしもキミが	凜	ゴマブックス	携帯小説

上位には上がっていないが、はやみねかおる氏の作品は多くの生徒に読まれている。

【2年生・女子】

1	76人	恋空(上・下)	美嘉	スターツ出版	携帯小説
2	29人	赤い糸(上・下)	メイ	ゴマブックス	携帯小説
3	18人	純愛	稲森遥香	スターツ出版	携帯小説
4	16人	星空	流奈	スターツ出版	携帯小説
	16人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館	児童書
6	15人	もしもキミが	凜	ゴマブックス	携帯小説
7	10人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社	ヤング
8	9人	天使がくれたもの	Chaco	スターツ出版	携帯小説
9	8人	ハッピーバースデー	青木和雄	金の星社	ヤング
	8人	ブレイブ・ストーリー(上・下)	宮部みゆき	角川書店	一般書
10	7人	そのときは彼によろしく	市川拓司	小学館	ヤング
	7人	佐賀のがばいばあちゃん	島田洋七	徳間書店	一般書
	7人	1リットルの涙	木藤亜也	エフエー出版(幻冬舎)	一般書

【3年女子】

1	57人	恋空(上・下)	美嘉	スターツ出版	携帯小説
2	18人	ハリー・ポッター(シリーズ)	J.K.ローリング	静山社	ヤング
3	18人	バッテリー(全6巻)	あさのあつこ	教育画劇	ヤング
4	15人	赤い糸(上・下)	メイ	ゴマブックス	携帯小説
5	13人	テディベアに関する本		各社	
6	12人	ハッピーバースデー	青木和雄	金の星社	ヤング
7	11人	ダレン・シャン(シリーズ)	ダレン・シャン	小学館	児童書
	11人	佐賀のがばいばあちゃん	島田洋七	徳間書店	一般書
9	9人	天使がくれたもの	Chaco	スターツ出版	携帯小説
10	8人	青空のむこう	アレックス・シラー	求竜堂	ヤング
	8人	空	Chaco	小学館	携帯小説
12	7人	あおぞら	星野 夏	ポプラ社	ヤング
	7人	純愛	横森遙香	スターツ出版	携帯小説
14	6人	ダイブ(全4巻)	森絵都	講談社	ヤング
15	5人	この涙が枯れるまで	ゆき	スターツ出版	携帯小説
	5人	博士の愛した数式	小川洋子	新潮社	ヤング
	5人	プリンセス	陽未	スターツ出版	携帯小説
	5人	星空	流奈	スターツ出版	携帯小説
	5人	大好きやったんやで	れい	河出書房新社	携帯小説
	5人	グッドラック	アレックス・叱ラ	ポプラ社	ヤング
	5人	ITと呼ばれた子	D・ベルザー	ソニーマガジン	ヤング
	5人	星新一の本		各社	

「ブックスタート調査 平成18年度報告」から

樟蔭女子大学人間科学部心理学科

辻 弘美

研究目的：乳幼児のコミュニケーション発達において絵本がもたらす役割を検証するため。

【ブックスタート体験】

対象： 生後4ヶ月児健診参加した乳児とその養育者

調査内容：乳児の対絵本行動の観察

調査期間：2006年4月～2007年3月

【フォローアップ】

対象： 生後10ヶ月児の養育者

調査内容：親子コミュニケーションの実態と子のコミュニケーション行動発達

調査期間：2006年4月～

対象者： 267組（養育者1名につき観察者1名）

「絵本に対する乳児の行動観察」から

- ・ 読み手への注視（自発的注意 読み手の音声や接近への反応的注意）
 - ・ 絵本への働きかけ（絵本をさわる ページをめくる）
 - ・ 情動的表現（リズムカルな手足の動き 音声）
 - ・ 絵本への注視（一点注視型 探索型）
-
- ・ 対象となった親子の50%以上がブックスタートについて初めて知ったと回答。
 - ・ 70%以上の親子は、絵本やお話を通した関わりを家庭で行っていることが示された。
 - ・ 対象となる乳児にきょうだいがいるほど、ブックスタートの認識の割合も高くなり、家庭での絵本との関わり頻度も高くなっている。これには親自身の読書に対する態度については、有意な関連性は認められなかった。
 - ・ 探索型の注視をする乳児は、一点注視型の乳児に比べ、家庭での絵本の読み聞かせを、より頻繁に経験していた。
 - ・ 女兒の注視タイプでは、女兒の探索タイプと一点注視タイプで、家庭での読み聞かせ頻度に有意な差がみられた。
 - ・ 絵本への働きかけで、女兒に家庭での読み聞かせ頻度に有意な差がみられた。

【フォローアップ調査】

- ・ 生後10ヶ月児を持つ保護者の80%以上が、ブックスタート体験以降、絵本への興味

を持つようになった、子どもと絵本を読むようになったとしている。

- ・ 一方で、図書館へ行くようになった、図書カードを作るようになったと回答した保護者は全体の30%以下にとどまった。
- ・ 興味あるものに対しての指さし行動において、この時期では発達の個人差がみられることがはっきりと示された。
- ・ 一方で、大人の簡単な話し言葉や表情の読み取り、簡単な手遊びが、この時期までにできるようになっていることが示された。
- ・ 絵本を読み聞かせていると、子どもは楽しそうにしていると認識しているだけでなく、自らも絵本とのかかわりを楽しいととらえている保護者が80%以上いることが示された。
- ・ 生後10ヶ月においては、子どもから読み聞かせを要求するのは全体の25%であった。親や年長の子どもから絵本を読むきっかけ作りがされていると考えられる。
- ・ 本好きになってほしいと思う、子どもの発達には絵本の読み聞かせは重要だととらえる保護者は、共に90%以上と、子育てにおける絵本への意識は高いことが示された。
- ・ 一方で、子どもの習い事についての考え方は、保護者間において、様々であることが示された。
- ・ 85%以上の保護者は子育ては充実しているととらえている。
- ・ 男児を持つ保護者は女児を持つ保護者に比べて「一日もはやく自立してほしいと思う」程度が高いことが示された。
- ・ 一方、男児よりも女児の保護者の方が、絵本とのかかわりへの興味が高く、子のコミュニケーション的行動の表れについて認識が高い頃が示された。

【縦断的研究 4ヶ月から10ヶ月の追跡調査】対象者：41組の親子

- ・ 4ヶ月齢時点における保護者の報告では、ブックスタート認識、読書、絵本の読み聞かせ頻度、乳児の気質的行動において、注視タイプ別の違いは見られなかった。
- ・ 10ヶ月齢時点における保護者の報告では、以下の2項目において注視タイプ別の違いが見られた。

イ = 子育てはストレスがたまるととらえる程度：(探索的注視 < 一点注視)

ロ = 子育ては充実しているととらえる程度：(探索的注視 > 一点注視)

- ・ 注視の仕方は、保護者による子どもの環境への適応性と関連性があることが示された。探索的な注視スタイルをとる乳児は一点注視スタイルをとる乳児に比べ、新しい環境への適応困難を示しにくいことが示唆された。
- ・ 探索型は一点型に比べて4ヶ月齢において、絵本とのかかわりを頻繁に経験している。絵本の共有経験の多少が、特定の絵本への注視スタイルを導くのか、生得的な乳児の学習スタイルが、絵本への反応としてあらわれたのかについては、さらに検討の余地がある。

子どもの読書活動の推進に関する法律
(平成13年12月12日法律第154号)

(目的)

第一条 この法律は、子どもの読書活動の推進に関し、基本理念を定め、並びに国及び地方公共団体の責務等を明らかにするとともに、子どもの読書活動の推進に関する必要な事項を定めることにより、子どもの読書活動の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって子どもの健やかな成長に資することを目的とする。

(基本理念)

第二条 子ども(おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。)の読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が整備されなければならない。

(国の責務)

第三条 国は、前条の基本理念(以下「基本理念」という。)にのっとり、子どもの読書活動の推進に関する施策を総合的に策定し、及び実施する責務を有する。

(地方公共団体の責務)

第四条 地方公共団体は、基本理念にのっとり、国との連携を図りつつ、その地域の実情を踏まえ、子どもの読書活動の推進に関する施策を策定し、及び実施する責務を有する。

(事業者の努力)

第五条 事業者は、その事業活動を行うに当たっては、基本理念にのっとり、子どもの読書活動が推進されるよう、子どもの健やかな成長に資する書籍等の提供に努めるものとする。

(保護者の役割)

第六条 父母その他の保護者は、子どもの読書活動の機会の充実及び読書活動の習慣化に積極的な役割を果たすものとする。

(関連機関等との連携強化)

第七条 国及び地方公共団体は、子どもの読書活動の推進に関する施策が円滑に実施されるよう、学校、図書館その他の関係機関及び民間団体との連携の強化その他必要な体制の整備に努めるものとする。

(子ども読書活動推進基本計画)

第八条 政府は、子どもの読書活動の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画(以下「子ども読書活動推進基本計画」という。)を策定しなければならない。

2 政府は、子ども読書活動推進基本計画を策定したときは、遅滞なく、これを国会に報告するとともに、公表しなければならない。

3 前項の規定は、子ども読書活動推進基本計画の変更について準用する。

(都道府県子ども読書活動推進計画等)

第九条 都道府県は、子ども読書活動推進計画を基本とするとともに、当該都道府県における子どもの読書活動の推進の状況等を踏まえ、当該都道府県における子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画(以下「都道府県子ども読書活動推進計画」という。)を策定するよう努めなければならない。

2 市町村は、子ども読書活動推進基本計画(都道府県子ども読書活動推進計画が策定されているときは、子ども読書活動推進計画及び都道府県子ども読書活動推進計画)を基本とするとともに、当該市町村における子どもの読書活動の推進の状況等を踏まえ、当該市町村における子ども読書活動の推進に関する施策についての計画(以下「市町村子ども読書活動推進計画」という。)を策定するよう努めなければならない。

3 都道府県又は市町村は、都道府県子ども読書活動推進計画又は市町村子ども読書活動推進計画を策定したときは、これを公表しなければならない。

4 前項の規定は、都道府県子ども読書活動推進計画又は市町村子ども読書活動推進計画の変更について準用する。

(子ども読書の日)

第十条 国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるため、子ども読書の日を設ける。

2 子ども読書の日は、四月二十三日とする。

3 国及び地方公共団体は、子ども読書の日趣旨にふさわしい事業を実施するよう努めなければならない。

(財政上の措置等)

第十一条 国及び地方公共団体は、子どもの読書活動の推進に関する施策を実施するため必要な財政上の措置その他の措置を講ずるよう努めるものとする。

附則

この法律は、公布の日から施行する。

参考：衆議院文部科学委員会における附帯決議

政府は、本法施行に当たり、次の事項について配慮すべきである。

一 本法は、子どもの自主的な読書活動が推進されるよう必要な施策を講じて環境を整備していくものであり、行政が不当に干渉することのないようにすること。

二 民意を反映し、子ども読書活動推進基本計画を速やかに策定し、子どもの読書活動の推進に関する施策の確立とその具体化に努めること。

三 子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において、本と親しみ、本を楽しむことができる環境づくりのため、学校図書館、公共図書館の整備充実に努めること。

四 学校図書館、公共図書館等が図書を購入するに当たっては、その自主性を尊重すること。

五 子どもの健やかな成長に資する書籍等については、事業者がそれぞれの自主的判断に基づき提供に努めるようにすること。

六 国及び地方公共団体が実施する子ども読書の日の趣旨にふさわしい事業への子どもの参加については、その自主性を尊重すること。